

研究紀要

第24号

山口県下関市潮待貝塚の発見回顧録 伊東照雄

下関市潮待貝塚出土の動物遺存体2 —下関市立考古博物館保管資料の調査— 沖田絵麻

2020

下関市立考古博物館

目 次

公開にあたって

山口県下関市潮待貝塚の発見回顧録

伊東照雄・・・・・・・・・ 1

下関市潮待貝塚出土の動物遺存体 2 —下関市立考古博物館保管資料の調査—

沖田絵麻・・・・・・・・・ 6

公開にあたって

下関市立考古博物館では、本市の歴史文化を考古学的側面からひも解き、知的満足度の高い生涯学習施設としての機能を一層充実し、より多くの方々にご利用いただけるよう、展示、教育普及、調査研究、地域連携など様々な博物館活動を通じて、努力しているところです。研究紀要の公開もそのような博物館活動の一環として大切な役割を担っています。

本号は、平成31年3月に公開した第23号に次ぐ24号として、下関市潮待貝塚に関する研究成果を公開しております。潮待貝塚は、縄文時代中期から後期にかけての遺跡です。戦後間もない1950年（昭和25年）に下関市大字富任の砂堆で地元住民により発見され、その後の発掘調査では多量の縄文土器や貝類をはじめとする動物遺存体などが出土しました。その当時、山口県の長門地域の沿岸部には縄文時代の貝塚は存在しないと半ば定説化されていたことから、それに一石を投じる重要な発見となりました。発見から70年を経た現在にあってもなお、山口県における縄文時代遺跡の少なさも相まって、縄文時代の調査研究を進めるうえで欠かすことのできない遺跡として注目されています。

発見から70年の節目を迎えるにあたり、考古博物館では平成30年度から土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムとの共同研究により、潮待貝塚から出土したおびただしい数の動物遺存体の再整理を行なってきました。その結果、本号で沖田絵麻氏による「下関市潮待貝塚出土の動物遺存体2ー下関市立考古博物館保管資料の調査ー」としてその成果を公表するに至りました。また、早くから潮待貝塚の調査に携わり、本市教育委員会で文化財保護や考古博物館の建設にご尽力された伊東照雄氏からは、「山口県下関市潮待貝塚の発見回顧録」と題して潮待貝塚の発見経緯とその後の調査の歩みについて寄稿していただきました。まずもって、両氏に心よりお礼申し上げます。

考古博物館は、今後も博物館活動の充実をはかるため日々の調査研究活動を深め、その成果を展示活動や普及活動に反映させていく所存です。日頃から当館の活動にご理解とご協力をいただいております関係各位におかれましては、心より御礼申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和2年（2020年）3月

下関市立考古博物館
館長 沖中 真志

山口県下関市潮待貝塚の発見回顧録

伊東 照雄

はじめに

1945年に第2次世界大戦が終結し、荒廃した国土が新しい日本社会として復活する中、従来の日本史を身近な歴史として見直す動きが活発となり、民間人の中から郷土の歴史を研究する人達が増えてきた。

下関市でも郷土史の研究会が組織されたり、消滅を繰り返していた。研究会の多くは、より身近な郷土の歴史、習俗など多岐にわたっていた。そのようななか、敗戦後の満州から、故郷の下関市安岡町の漁師町に帰国した吉村次郎（美廣）は、職の無いまま、失業対策事業の労務者として、日に240円の賃金を得ながら、考古学や民俗、安岡浦方言の収集など、幅広い調査に没頭していた。

1 綾羅木郷台地遺跡との出会い

吉村次郎氏は、綾羅木郷台地遺跡との関わりも深かった。潮待貝塚の発見の直前の昭和25年（1950）7月11日、吉村氏は研究仲間の原能論氏に誘われて、綾羅木郷台地へ行った。当時、郷台地の北東側にある了元寺西側の切通し道路工事が行われており、その日の工事が終わったあとは、弥生土器の破片が散乱していた。採集した壺の中に、口縁部の外面と内面に、朱で彩色した破片が含まれていた。彩色した土器片や同時に採集した土器片は、小字名から寺屋敷地区出土として整理され、当時、下関市で唯一の博物館だった財団法人長府博物館（現下関市立歴史博物館）の一角で展示されることになった。

この博物館は、桂弥一が長門尊攘堂として昭和8年（1933）に創造し、幕末・明治維新の資料を中心に近世研究の伝統を受けつぐ博物館であるが、椿惣一館長の英断で、初めて考古資料が展示されることになったのである。寺屋敷地区出土の弥生土器の展示は、来館者の注目をひき、やがて同地区から田上伝介氏が発見した大型の蛤刃の大型石斧と壺形土器も展示に加わり、その後の綾羅木郷台地遺跡の本格的な分布調査のきっかけになった。

このような綾羅木郷台地遺跡の弥生土器に慣れ親しんでいた吉村氏の経験と知識が、潮待貝塚が縄文時代の遺跡であるとの認識を確かなものとする事となったのである。

2 潮待貝塚の発見

吉村氏が郷台地で弥生土器を発見してから一月後の昭和25年（1950）8月17日、彼はいつものように近所の子供を誘って、下関市富任町の官林山（別名ピンピン山）山頂にあると伝えられる石棺墓を探して、藪の中を歩き、昼食をとる場所として小学校の同級生だった西原又一氏宅を訪れた際に、同氏から自宅の南側の畠に貝塚があると教えられた。

貝塚は、昭和25年（1950）4月、土地所有者の岡田竜雄氏が畠として使うために、松林を伐開し、砂丘を平坦に整地した際に貝殻や土器などが出土していたが、重要な発見とは誰も気付かず、土砂もろとも近くの畠に持ち去られたり、山口銀行安岡支店の新築工事の基礎工事などに使われてしまっていたが、幸いにも畠の南端に残った松林のそばに貝塚の一部がマウンドのように盛り上がり残り、遺物と砂が互層になって堆積していたのである。私の手元に残る資料によると、畠に散乱している貝殻に混じって土器を発見した時の様子を吉村氏は次のように書き残している。

「これまでに見なれてきた弥生式土器と全くちがう。これぞまごうことなき縄文式どきである。経験のな

い私にもわかった。そう感じたとき、はげしい感激におそわれ、足がすくみ、しばし茫然自失の状態に陥った。なぜなら、今までの山口県考古学界では、長門外海部には、縄文遺跡はない、という考え方が支配的であり、私もそれに影響されていたから。」さらに、西原又一氏からもたらされた情報について「西原氏が貝塚といったのは、貝がたくさん出るから貝塚と表現したままで、これが縄文貝塚であり、長門外海部における最初の発見になるとは思っていなかっただろう。」と付けくわえている。

下関市大字富任正町 103 番地 257 (当時) にまたがるこの貝塚は、西に向かって弧状に広がる響灘沿岸から、東へ約 600m、標高 5m 前後の砂丘にある。地名である正町は、当時市立安岡小学校に保存されていた安岡郷土誌 (1935 年刊) に、「正町 (中略) は、潮待の儀にて、繁船場なりしが、その頃浅海となりしと見へ、満潮を待ちて出帆せし爲、その名ありしという。(中略) いつしか潮待が正町に転ず。今の児玉源次郎氏の宅地なり。」とあることから、これをもって吉村氏は、郷土誌に残るこの伝承にもとづいて潮待貝塚と名付けたのである。

当時、高校 1 年生だった私は貝塚の発見を新聞で知り、西原氏を訪ねて場所を教えてもらい、貝塚へ赴き畠で縄文土器を採集した。これが私の人生で初めて採集した土器だった。その後、蒸し暑い 8 月のある夜、採集した土器を古新聞に包み、漁師町特有の狭い路地の一角にある吉村氏を訪ね、採集した土器を手渡した。



図 1 潮待貝塚の位置 (1 : 25,000) ※基図は国土地理院昭和 46 年 (1971) 発行

吉村氏が採集した遺物は、木製の古い餅箱に脱脂綿を敷き、ていねいに並べてあった。私の突然の訪問にもかかわらず、近くの店からかき氷を取り寄せ、歓迎してもらい、夜おそくまで雑談したことを覚えている。

貝塚の発見は、山口県考古学研究の先覚者として活躍していた小川五郎氏へ吉村氏が連絡をした。知らせを受けた小川氏は、8月下旬をむかえ現地の確認を行い、結果を山口県教育委員会へ報告。報告にもとづき、県教委は下関市教育委員会と協議の結果、昭和25年（1950）10月6日から協同で発掘調査を行うことを決定した。

3 発掘調査

（1）第1次発掘調査

下関市では、初めての画期的な行事であった。調査は、旧京都帝国大学で浜田耕作氏に師事し、山口県考古学研究の重鎮として活躍していた小川氏、山口大学教育学部光分校へ先史地理学の研究者として赴任した講師の小野忠熙氏の2人が担当した。

乏しい予算の中、多くの市民がボランティアで作業に参加した。私も作業員として参加した。偶然だったが、隣に並んで作業していたのは、当時の県立豊浦高等学校で教鞭をとっていた古生物学者の岡藤五郎先生だった。素手で作業していた私に、作業用の軍手を貸していただいたが、返却する機会がないまま、数10年がすぎた。下関市では、その後もボランティアによる発掘作業が、なかば習慣になった。

調査は、島の南端に残った松林のそばに、マウンド状に盛り上がった貝塚の一部をA地点とし、小川氏が担当した。A地点から約40m北の段丘と砂丘が接する場所をB地点とし、小野氏が担当した。

A地点では、上層から順に、遺物を含んだ30cm内外の厚さをもつ表砂層、厚さ80cm～1.4mの遺物を含んだ黒色砂層、貝層、淡黄白色砂層の順に堆積していた。貝層は黒色砂層と淡黄白色砂層に挟まれた状況である。

貝層から出土した縄文土器には東中国や北九州地域の土器が混じっていたことから、小川氏は貝塚が形成されたのは、縄文時代中期末頃と判断した（小川・小野1955）。その後、潮見浩氏が分類作業を行っている（吉村編1965）。これらA地点出土の遺物は、財団法人長府博物館で保管されてきたが、近年になり、下関市立考古博物館へ移管され、改めて整理が行われた（澤下2000）。

整理の結果、A地点出土の縄文土器は、本州瀬戸内海南岸の岡山県倉敷市一帯で成立した、縄文時代中期の船元式土器が上限になることが分かった。ついで縄文時代後期後半を迎えると、中期と同様に倉敷市周辺で成立した福田KⅡ式土器、同玉島市周辺で成立した中津式土器と共に熊本県下益己郡阿高出土の阿高式土器、更に高知県宿毛出土の宿毛式土器など、広範囲にわたる地域からの土器が共伴している。後期中葉には、縁帯文土器のほか、



岡山県児島郡一帯から発見 写真1 潮待貝塚A地点1トレンチ

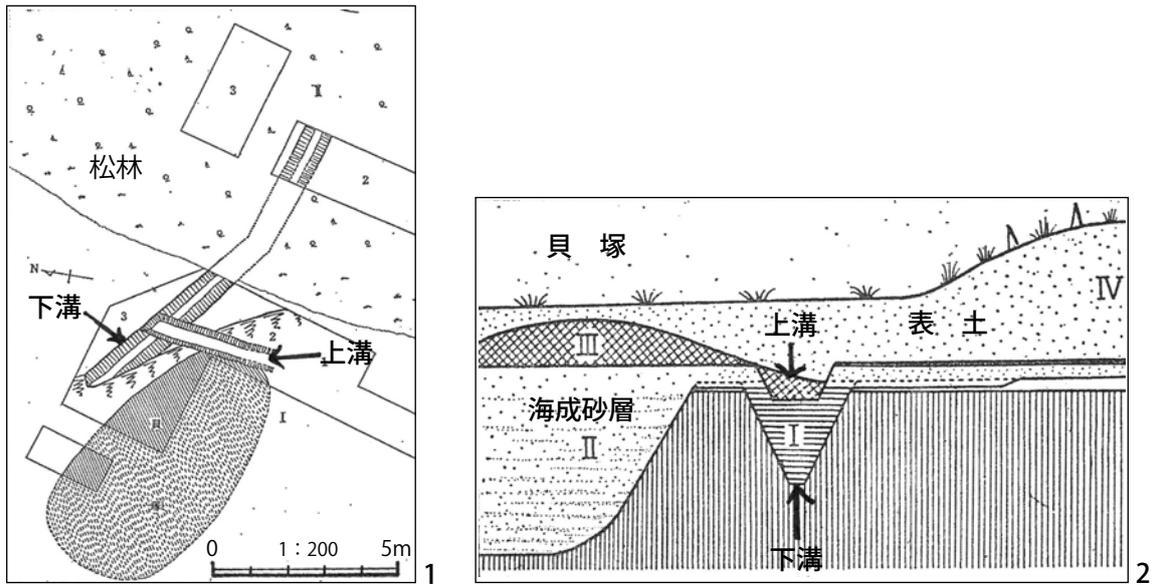


図2 潮待貝塚平面図及びB地点1トレンチ概念図 ※『下関市史 原始-中世』(下関市1965)より一部改変して転載。

された彦崎 K II 式土器と山口県瀬戸内沿岸に面した宇部市からもたらされた月崎上層式土器と熊本県北久根式土器、福岡県北部の玄海灘に面した宗像市の鐘崎式土器など、瀬戸内海と九州などの各地からの土器が混在していた。後期後葉から晩期中葉にかけての土器は見出せなかったが、後葉になり、夜白式の浅鉢の破片が1点、確認されている。

以上のように、A地点では瀬戸内海東部の沿岸地域と九州の縄文文化が混在し、まれであるが高知県宿毛式土器が1点見出されている。各時期を通じて、各地の多様な文化が交雑しているが、日本海西端にあたるこの貝塚には、山陰側からの影響は確認されていない。

土器以外の出土品としては、土製品、装飾品、石器、動物遺存体などがある。土製品には土弾と耳栓がある。耳栓の直径は、最大3.2cm、高さ2.2cm。ドーム状に形成された平坦な頂面には、四本の沈線が同心円状に刻まれている。装飾品には滑石製の垂飾がある。長さ4cm、最大幅1.3cm、歯牙状に加工され、先端はわずかに湾曲し、尖っている。上部には紐を通す孔を穿っている。約半分を欠損した貝輪がある。最大径8.8cmでベンケイ貝を加工している。石器は、打製と局部磨製の石斧、黒曜石とサヌカイト製の石鏃、尖頭石器、扁平打製石斧、石錘、磨石、叩石、砥石、スクレイパー、石皿などがある。石器のなかでも不定形の剥片を素材にしたスクレイパーが多い。動物遺存体は、イノシシ、シカなどの獣骨を山口大学農学部教授の日野巖氏、貝類は河本卓介氏が27種に分類した(河本1956)。

一方、B地点では、貝層と住居跡との関係を探るために設けたトレンチのうち、第3トレンチの西北部は台地の末端近くで、洪積層と幅80cm、深さ約85cm掘り下げたところで溝状遺構を確認したが、調査期日に至ったため、一旦調査を終了した。

この潮待貝塚の第1次発掘調査が終わって間もなくして、吉村氏は下関市立長府図書館の職員として採用されることとなる。そして、のちに下関市教育委員会社会教育課主事として定年をむかえる昭和41年(1966)3月31日まで、下関市内を中心に考古・民俗等多岐にわたって文化財の調査・保護、執筆に追われた。

(2) 第2次発掘調査

昭和25年(1950)の第1次発掘調査から11年後、昭和36年(1961)3月12日から15日の日数をあて、山口県と下関市の両教育委員会は共催で第2次の発掘調査を実施した(吉村1965)。調査は、小野忠熙氏

が担当し、潮見浩氏、三浦肇氏が参加した。ちなみに、三浦氏は調査の合間に周辺の分布調査を行い、梶栗町に至る崖に露出した竪穴を発見した。これが、のちの辻遺跡である。

さて、B地点の調査の結果、同地点では縄文時代後期初頭になると、段丘面に東西方向に伸びる幅約80cm、深さ約95cm、断面がV字形の溝状遺構を掘り、そばに居住区を作ったが、やがて到来した温暖化に伴い、海水面の上昇とともに一帯が水没した。

その後、縄文時代後期中葉頃になり、寒冷化が進むと、海水面が後退し、再びB地点一帯は陸化が進み、標高5m前後の段丘上に居住区が現れ、古い溝と交差して、断面が逆台形で、上面の幅が約52cm、深さ約54cmの溝状遺構が掘削された(図2)。B地点の縄文集落は、限られた調査面積であったため、全容は解明できなかったが、標高5m前後の海岸に近い段丘には縄文時代の集落が展開していたことが推定される。これ以降、潮待貝塚での学術的な発掘調査は行われることもなく、遺跡は地下に埋藏されたまま都市化が進み、地上からは遺跡の面影は失われた。第1次発掘調査が終わった昭和25年(1950)、毎日新聞下関支局の嘱託として下関市の文化欄を担当するかたわら、画家として下関市の風景を描いた今井平馬氏は、調査が終了したA地点の状景を1枚の油絵で残してくれた(図3)。今となれば、当時の面影を伝える資料としても貴重な絵画である。

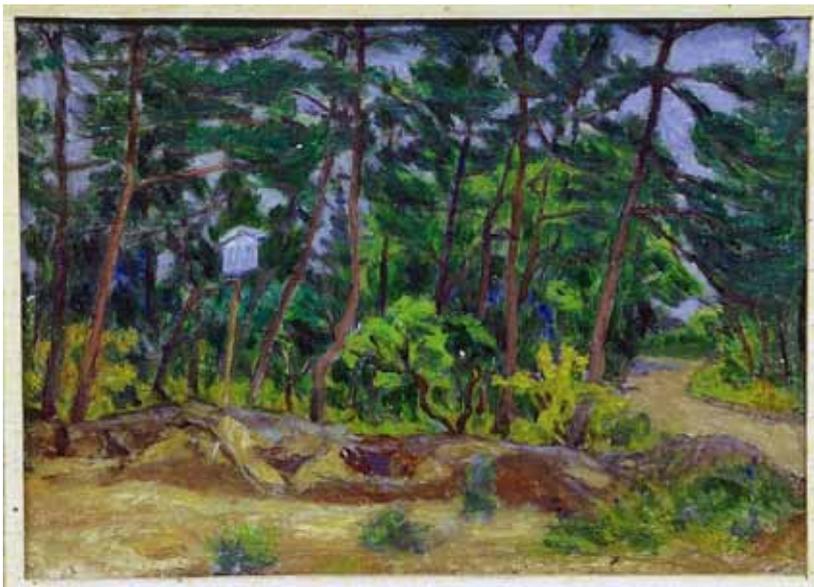


図3 発掘調査終了後の潮待貝塚
(北から、昭和25年秋)
※今井平馬・画

参考文献

- 1 小川五郎・小野忠熙 1955「山口県下ノ関市潮待貝塚」(『日本考古学年報』3 日本考古学協会)
- 2 吉村次郎編 1965「潮待貝塚」(『下関市史 原始—中世』)
- 3 澤下孝信 2000「下関市域出土資料の研究1—下関市潮待貝塚の遺物1—」(『研究紀』第4号 下関市立考古博物館)
- 4 澤下孝信 2003「下関市域出土資料の研究2—下関市潮待貝塚の遺物2—」(『研究紀要』第7号 下関市立考古博物館)
- 5 河本卓介 1956「山口県柳井市出身の貝塚研究者」(『山口県産貝類目録』山口県立山口博物館)

下関市潮待貝塚出土の動物遺存体 2

—下関市立考古博物館保管資料の調査—

沖田 絵麻

はじめに

潮待貝塚は、下関市富任町に所在する縄文時代の貝塚遺跡である(図1)。1950年4月、土地所有者によって土地削平がおこなわれた際に貝層や遺物が露出し、それを知った吉村次郎氏によって縄文時代の貝塚であることが確認された。1950年10月に第1次、1961年3月に第2次の、2度にわたる発掘調査がおこなわれ、その成果は小川(1955)、小野(1961)、吉村(1965)などに報告されている。

潮待貝塚から出土した遺物は、山口大学埋蔵文化財資料館(以降、山大資料館と表記)と下関市立考古博物館(以降、考古博物館と表記)に保管されている。出土遺物のうち、土器・石器・貝輪などの人工遺物については、前掲報文のほか、澤下(2000・2003)、川崎(2016)によって詳細が明らかにされている。

動物遺存体については、日野 巖氏・河本卓介氏が同定している。その結果は、「哺乳類にイノシシ・シカ・イヌ(中略)、タイとアカエイなどの魚類(中略)、節足動物にはアカフジツボとウニ(中略)貝類には、アサリ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・オキシジミ・バイなどが多く、このほかアワビ・サザエ・カキ・テングニシ・シオフキ・ヤマトシジミ・スガイ・ミスジカワニナ・フトヘナタリ・ツメタガイ・レイシなど」(小野1961)、「小禽類」(小川1955)、のように分類名の列記に留まり、各分類群の数量などの詳細な内容は報告されていない。

潮待貝塚は、山口県内では数少ない縄文時代の貝塚遺跡のひとつであり、この地域の人々が生活の中でどのように動物と関わり、資源として利用してきたかを知り得る貴重な遺跡である。その情報を研究に活用するためには動物遺存体の詳細が不可欠であるため、潮待貝塚出土資料の調査を実施した。これまでに、山大資料館が所蔵する動物遺存体(以降、山大資料と表記)については調査結果を報告した(沖田2018)。本稿では、考古博物館が所蔵する動物遺存体資料(以降、考古博資料と表記)の調査結果を報告する。

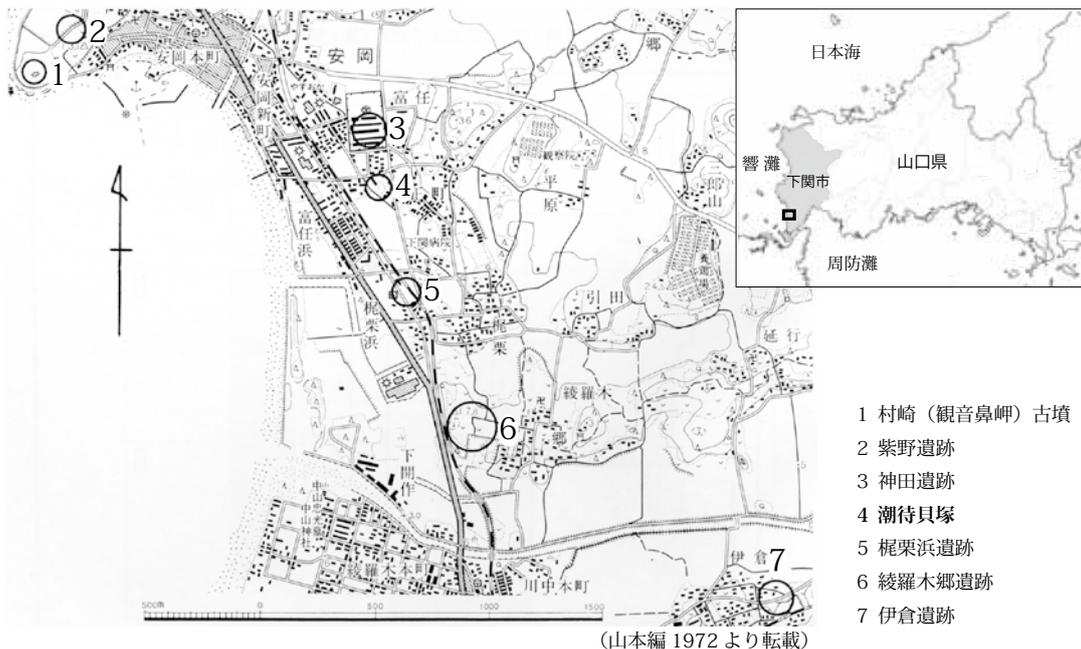


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 遺跡の概要

潮待貝塚は、海岸から東に約 500 m ほど内陸の、標高 5 m 前後の砂堆上に立地する。現状は宅地である。

層序や遺構の詳細は前掲の報文に詳述されているので、ここでは吉村氏の報告（吉村 1965）から貝塚と出土遺物についての記述を抜粋する。貝塚は 40 m ほどの距離をおいて 2 か所確認され、南側は A 地点、北側は B 地点として発掘調査された。A 地点の貝層は、遺物を多量に包含する黒色砂層中に薄いレンズ状や小さな塊状をなして堆積していた。B 地点では、長軸約 6 m の楕円形を呈する貝塚が確認された。いずれも小規模な地点貝塚で、縄文後期前半から中葉にかけて形成されたとみられている。

潮待貝塚からは、縄文時代中期前葉から晩期後葉にいたる土器群が出土しているが、後期後葉～晩期中葉の土器はみられず、中期の土器は後期の土器より少ないことが明らかになっている（澤下 2000）。後期初頭から中葉にかけての土器が主体であり、その内容は瀬戸内の要素と九州の要素との交錯がみられるという（吉村 1965）。石器は石斧、石鏃、石錘、石皿、砥石、敲石などが出土している。澤下（2003）によれば、考古博物館所蔵資料の石器の中ではスクレイパー類が最も多い。その他に土製耳栓、貝輪、滑石製垂飾などが出土している。

2. 調査資料

考古博物館が保管する潮待貝塚出土遺物のうち、動物遺存体（貝殻や動物骨）の全てを対象とした。深いコンテナ 6 箱分である。遺存体の採取方法は不明であるが、内容を見る限りは篩選別やフローテーション法は用いられず、全て目視によって採取された可能性が高い。

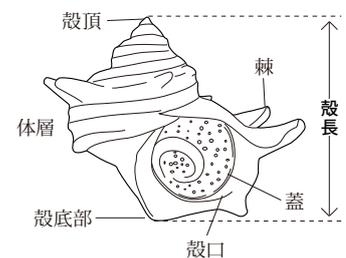
資料の一覧は、同定結果と共に稿末の表 9・10 に示す。資料の出土位置（地点と層位）は、添付されたラベル、資料を包む新聞紙やビニール袋のマジック書き、貝殻や骨に直接墨書された注記によった。B.N.（バスケット・ナンバー）は、考古博物館の整理番号である。ラベルや袋書きがなく、出土位置に関する情報の無い資料も多かった。人工遺物についても指摘されてきたことであるが（澤下 2000・2003、川島 2016）、潮待貝塚出土遺物には、報告された地区・層位と個々の資料の対応関係が不明であるという問題点がある。

今回調査した考古博資料のうち、調査年次が明らかなものについては、第 2 次発掘調査で出土した資料が多い。その他に、第 1 次・第 2 次のどちらの発掘調査日程にも含まれない日付が記された資料も存在する。吉村氏が発掘調査の前に遺物を表面採集している（小川 1955）ほか、発掘調査の後に採集された遺物もある（澤下 2000・2003）との記述があることから、発掘調査期間外に採取された表採資料が一定量含まれている可能性がある。このように、出土位置によって遺存体の内容を検討することが難しい状況であるため、山大資料の調査（沖田 2018）の方法と同様に、全資料を一括で扱うことにした。

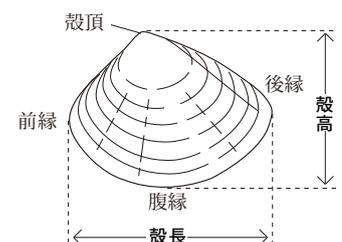
3. 調査の方法

資料は水洗せず、乾燥状態でクリーニングと接合をおこなった。また、貝殻のくぼみなどに溜まった砂をかき出して茶漉し器で篩い、微細遺存体を抽出した。その後、図鑑や現生標本との比較により種と部位を同定した。陸生貝類の同定は増野和幸氏に依頼した。

同定した遺存体の残存部位によって数をカウントし、破片数（NISP）と最小個体数（MNI）を算出した。合わせて、色調や傷などの破壊痕跡の観察をおこない、計測可能な場合はノギスによる計



【巻貝の各部名称】



【二枚貝の各部名称（図は左殻）】

図 2 貝殻の部位と計測箇所

表1 破損痕跡の分類基準

規則性の高い創傷：ヒトによる加工の可能性		
Aタイプ：切断(対象を完全に切断している切創：cut mark)		a 溝面が平滑 切創切削痕跡：cut or scrape mark
Bタイプ：切創(5mm以上の深さ)	1 線状に伸びた痕跡	b 溝片面が破断 打撃叩切痕跡：chop or huck mark
Cタイプ：切創(1～5mmの深さ)	2 刺突状に止まった痕跡	c 断面に多数の平行線状痕跡 鋸引痕跡：saw mark
Dタイプ：切創(1mm未満の深さ)	3 水平様に削いだ痕跡	
規則性の低い創傷：動物による損壊の可能性		
Yタイプ：局部的かつ連続的に孔を生じる → イヌ等食肉目の嚙痕 (日本の多くの遺跡の場合はイヌの可能性が高いと考えられるが、オオカミやクマ等の他の食肉目の可能性もある)	イヌ嚙痕	1 垂直の孔のみ
Zタイプ：二条の溝が対になり、局部的に損壊 → ネズミ類などげっ歯類の嚙痕 (日本の多くの遺跡の場合はネズミ類と考えられる)	ネズミ嚙痕	2 溝条をとまなう
アンダーラインが付された部分が分類名		

富岡ほか(2002)第1表より一部改変

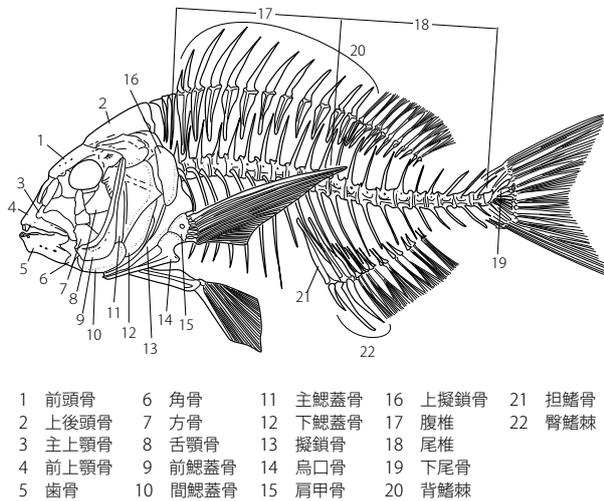


図3 魚類の骨格

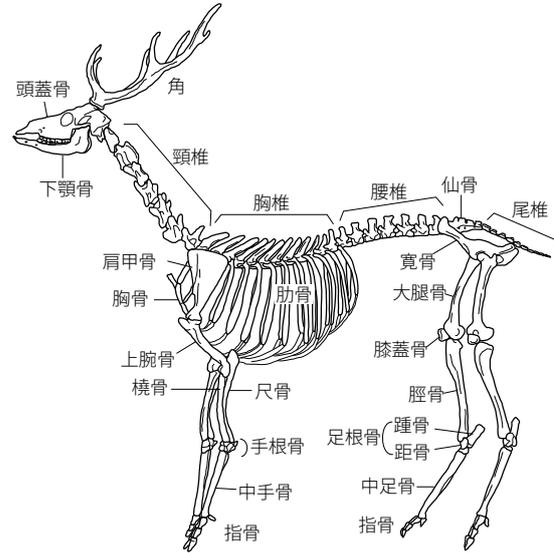


図4 哺乳綱の骨格

測をおこなった。貝殻の部位名称と計測箇所を図2に、魚類と哺乳綱の骨格部位名称を図3・4に示した。破損痕跡の分類は、富岡ほか(2002)の分類基準(表1)を参考にした。脊椎動物骨の計測はDriesch(1976)によった。

4. 出土した動物

1) 貝類 (表2～5・9)

小型～中型の貝類と微小貝で構成される。表2・3に示す通り、出土した海産・淡水産の腹足綱は4目20科(種まで同定したものは31種)、陸産の腹足綱は1目5科(種まで同定したものは5種)、二枚貝綱は6目12科(種まで同定したものは23種)である。

(1) 腹足綱

表4に示すように、腹足綱の出土破片数は1897点である。出土位置が明らかなものは第2次調査B区の貝層や表層のもので、その他は表採とみられる資料や、出土位置不明の資料である。

岩礁底域群集のサザエやスガイ、干潟・内湾砂底群集のツメタガイ、干潟群集のウミニナ類、河川・湖沼群集のタニシ類やカワニナの出土が多い。種別で最小個体数が最も多いのはイボウミニナであり、オオタニ

シ、カワニナがこれに次ぐ。海産・淡水産のほとんどが食用になる貝類であることから、人の手で採集された食糧残滓と考えられる。

表2 出土した貝類：腹足綱

分類						棲息環境、備考
腹足綱	Gastronoda					
カサガイ目	Patellogastropoda	ツタノハガイ科	Nacellidae	マツバガイ	<i>Cellana nigrolineata</i> (Reeve, 1854)	岩礫底、潮間帯
古腹足目	Vetigastropoda	ニシキウズ科	Trochoidea	インダタミ	<i>Monodonta labio confusa</i> Tapparone-Cnefri, 1874	岩礫底、潮間帯
"	"	エビスガイ科	Calliostomatidae	エビスガイ	<i>Calliostoma unicum</i> (Dunker, 1860)	潮間帯～潮下帯上部、岩礫
"	"	サザエ科	Turbinidae	サザエ	<i>Turbo sazae</i> Fukuda, 2017	岩礫底、潮間帯下部～潮下帯(水深20m)
"	"	"	"	スガイ	<i>Lunella coronatus coreensis</i> (Recluz, 1853)	岩礫底、潮間帯
"	"	バテイル科	Tegulidae	クボガイ	<i>Cholorostoma lischkei</i> Tapparone-Cnefri, 1874	岩礫底、潮間帯～潮下帯(水深20m)
"	"	"	"	ヘソアキクボガイ	<i>Cholorostoma turbinatum</i> A. Adams, 1853	岩礫底、潮間帯～潮下帯(水深20m)
"	"	"	"	コシダカガンガラ	<i>Omphalius rusticus</i> (Gmelin, 1791)	岩礫底、潮間帯～潮下帯(水深20m)
"	"	"	"	オオコシダカガンガラ	<i>Omphalius pfeifferi carpenteri</i> (Dunker, 1882)	岩礫底、潮間帯～潮下帯(水深20m)
"	"	"	"	ヒメクボガイ	<i>Omphalius nigerrimus</i> (Gmelin, 1791)	岩礫底、潮間帯～潮下帯(水深20m)
"	"	ミミガイ科	Haliotidae	アワビ類	<i>Haliotis (Nordotis) sp.</i>	岩礫底、潮下帯
"	"	"	"	メガイアワビ	<i>Haliotis (Nordotis) gigantea</i> Gmelin, 1791	岩礫底、潮下帯(水深5～30m)
アマオブネガイ目	Neritimorpha	アマオブネガイ科	Neritidae	アマオブネガイ科の一種	Neritidae gen. et sp. indet.	-
新生腹足目	Caenogastropoda	オニノソノガイ科	Cerithiidae	コゲツノブエ	<i>Cerithium coralium</i> Kiener, 1841	干潟、砂泥底
"	"	ウミナ科	Batillariidae	ウミナ	<i>Batillaria multiformis</i> (Lischke, 1869)	内湾奥の砂泥質干潟。潮間帯の砂泥底
"	"	"	"	ホソウミナ	<i>Batillaria atramentaria</i> (A. Adams in G.B. Sowerby II, 1855)	外海の砂泥質干潟、潮間帯の砂泥底
"	"	"	"	イボウミナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguère, 1792)	内湾奥の砂泥質干潟。潮間帯の泥底
"	"	キバウミナ科	Potamididae	フトヘナタリ	<i>Cerithidea moerchii</i> (A. Adams in G.B. Sowerby II, 1855)	感潮域・干潟。内湾奥の潮間帯、河口のヨシ原、砂泥底
"	"	"	"	ヘナタリ	<i>Pirenella nipponica</i> Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	内湾奥部の泥質干潟、汽水域の中・低潮帯表層
"	"	"	"	カワアイ	<i>Pirenella pupiformis</i> Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	内湾奥の泥質干潟の泥底
"	"	カワニナ科	Pleuroceridae	カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i> (Gould, 1859)	河川湖沼
"	"	タニシ科	Vivipariidae	タニシ類	<i>Bellamyia sp.</i>	河川湖沼
"	"	"	"	オオタニシ	<i>Bellamyia (Cipangopaludina) japonica</i> (von Martens, 1860)	河川湖沼
"	"	スズメガイ科	Hipponicidae	キクスズメ	<i>Hipponix conicus</i> (Schumacher, 1817)	岩礫底、潮間帯～潮下帯の腹足類の殻上
"	"	クマサカガイ科	Xenophoridae	クマサカガイ	<i>Xenophora pallidula</i> (Reeve, 1842)	潮下帯(水深50～1050m)の泥底
"	"	ムカデガイ科	Vemetidae	オオヘビガイ	<i>Thylacodes adamsii</i> (Mörch, 1859)	内湾岩礫底、潮間帯
"	"	タマガイ科	Naticidae	ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i> (Röding, 1798)	干潟・内湾。潮間帯～潮下帯(水深50m)の細砂底
"	"	"	"	ゴマフダマ	<i>Natica tigrina</i> (Röding, 1798)	内湾、潮間帯～水深30mの砂泥底
"	"	テングニシ科	Melongenidae	テングニシ	<i>Hemifusus tuba</i> (Gmelin, 1781)	潮下帯(水深10～50m)の砂底
"	"	バイ科	Babyloniidae	バイ	<i>Babylonia japonica</i> (Reeve, 1842)	潮下帯(水深約10m)の砂底
"	"	アツキガイ科	Muricidae	レイシガイ	<i>Reishia bronni</i> (Dunker, 1860)	岩礫底、潮間帯～潮下帯
"	"	"	"	イボニシ	<i>Reishia clavigera</i> (Küster, 1860)	岩礫底、潮間帯
"	"	"	"	アカニシ	<i>Rapana venosa</i> (Valenciennes, 1846)	内湾。潮間帯～潮下帯の砂泥底
"	"	マクラガイ科	Olividae	マクラガイ	<i>Oliva mustelina</i> Lamarck, 1811	潮間帯～潮下帯(水深30m)の砂底
陸産貝						
柄眼目	Stylommatophora	キセルガイ科	Clausiliidae	スグヒダギセル	<i>Paganizaptyx stimpsoni subgibbera</i> (Boettger, 1877)	森林内(樹木の幹、朽木下、腐葉土)
"	"	ベッコウマイマイ科	Helicarionidae	ウラジロベッコウ	<i>Urazirochlamys doentzii</i> (Reinhardt, 1877)	森林(落葉下)
"	"	コハクガイ科	Zonitidae	ヒメコハクガイの仲間	<i>Hawaia sp.</i>	開地(礫下、落葉下)
"	"	ナンバンマイマイ科	Camaenidae	コベソマイマイ	<i>Satsuma (Satsuma) myomphala myomphala</i> (Martens, 1865)	朽木の下など
"	"	オナジマイマイ科	Bradybaenidae	オオベソマイマイの仲間	<i>Aegista sp.</i>	落葉下、フリイデルマイマイやタキカワオオベソマイマイの可能性
"	"	"	"	キュウシュウシロマイマイ	<i>Trishoplita eumenes eumenes</i> (Westerlund, 1883)	樹上性、草原を好む
"	"	"	"	マメマイマイの仲間	<i>Trishoplita sp.</i>	-
"	"	"	"	セトウチマイマイ	<i>Euhadra subnimbosa</i> (Kobelt, 1894)	樹上性

海産貝の和名・学名・棲息環境は奥谷編(2017)、逸見ほか(2012)、波部・小菅(1967)による。陸産貝の和名・学名・棲息環境は湊(1988)、福田ほか(1992)、東(1995)による。

非食用と考えられる貝も数種あった。キクスズメはアワビ類などの殻に着生する性質をもつため、他の貝に付着した状態で採集されたのであろう。また、出土量がわずかなクマサカガイやマクラガイは、漁獲対象にしたとは考えにくい。また、海岸に打上げられた死殻が混入した可能性がある。

陸産貝類は、ベッコウマイマイ科やコハクガイ科のような微小貝からセトウチマイマイまで、多様なサイズのもので出土している。おおむね森林や草原などの環境に分布し、樹上や落葉下に棲息する種類である。小川（1955）によれば、1950年の第1次発掘調査当時、貝塚の東側の小丘陵は松林で覆われ、西側には畑が広がっていた。出土した陸産貝類の棲息環境と発掘調査時の現地環境は一致しており、陸産貝類が自然分布していたと推定される。したがって、出土位置不明の陸産貝類については、後世に混入した可能性を否定できない。

(2) 二枚貝綱

表5に示すように、二枚貝綱の出土破片数は6415点である。出土位置の明らかなものは第2次調査B区の貝層や表層のもので、その他は表採とみられる資料や、出土位置不明の資料である。

内湾砂底群集のカガミガイやハマグリ、干潟群集のマガキやオキシジミが多い。二枚貝綱全体にみる割合

表3 出土した貝類：二枚貝綱

分類						棲息環境、備考
二枚貝綱	Bivalvia					
フネガイ目	Arcoida	フネガイ科	Arcidae	サトウガイ	<i>Scapharca satowi</i> (Dunker, 1882)	水深10～50mのやや外洋の砂底
"	"	"	"	クマサルボウ	<i>Scapharca globosa ursus</i> (Tanaka, 1959)	内湾、水深5～20mの砂泥底
"	"	"	"	サルボウ	<i>Scapharca kagoshimensis</i> (Tokunaga, 1906)	内湾、潮下帯上部から水深20mの砂泥底
"	"	"	"	ハゴロモガイ	<i>Diluvarka ferruginea</i> (Reeve, 1844)	水深10～60mの細砂底
"	"	"	"	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus, 1758)	干潟、内湾奥。潮間帯～潮下帯(水深10m)の泥底
"	"	タマキガイ科	Glycymerididae	ベンケイガイ	<i>Glycymeris (Veletuceta) albolineata</i> (Lischke, 1872)	水深3～20mの細砂底
ウグイスガイ目	Pterioidea	イタボガキ科	Ostreidae	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg, 1793)	干潟・内湾。汽水性内湾の潮間帯～潮下帯、砂礫底、泥底
"	"	"	"	イワガキ近似種	<i>Crassostrea cf. nippona</i>	-
"	"	ハボウキガイ科	Pinnidae	ハボウキガイ科の一種	Pinnidae gen. et sp. indet.	-
イタヤガイ目	Pectinoida	イタヤガイ科	Pectinidae	イタヤガイ	<i>Pecten albicans</i> (Schröter, 1802)	水深10～100mの砂底
イシガイ目	Unionoida	インガイ科	Unionidae	マツカサガイ	<i>Pronodularoa japonensis</i> (Lea, 1859)	河川湖沼
マルスダレガイ目	Veneroida	シジミ科	Corbiculidae	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime, 1864	感潮域
"	"	"	"	シジミ類	<i>Corbicula</i> sp.	ヤマトシジミあるいはマシジミの可能性
"	"	ザルガイ科	Cardiidae	ザルガイ科の一種	Cardiidae gen. et sp. indet.	-
"	"	マルスダレガイ科	Veneridae	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i> (Reeve, 1850)	内湾、潮間帯下部から潮下帯(水深60m)の細砂底
"	"	"	"	フカカガミ	<i>Phacosoma abyssicum</i> Habe, 1961	水深50～200m
"	"	"	"	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i> (A. Adams & Reeve, 1850)	内湾、潮間帯中部から潮下帯(水深10m)の砂礫泥底
"	"	"	"	Macridiscus属の一種	<i>Macridiscus</i> sp.	コタマガイあるいはオキアサリの可能性
"	"	"	"	オキアサリ	<i>Macridiscus multifarius</i> Kong, Matsukuma & Lutaenko in Kong, Matsukuma, Hayashi, Takada & Li, 2012	潮間帯下部の砂底
"	"	"	"	マツヤマフスレ	<i>Callista chinensis</i> (Holten, 1803)	水深5～50mの砂底
"	"	"	"	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Röding, 1798)	内湾・河川域の中・低潮帯から水深5mの砂泥底
"	"	"	"	チョウセンハマグリ	<i>Meretrix lamarckii</i> Deshayes, 1853	潮間帯下部から水深20mの外洋に面した砂底
"	"	"	"	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin, 1791)	干潟・内湾奥、潮間帯下部から水深20mの砂泥底
"	"	マテガイ科	Solenidae	マテガイ	<i>Solen strictus</i> Gould, 1861	内湾、潮間帯中部の砂底
"	"	バカガイ科	Mactridae	バカガイ	<i>Mactra chinensis</i> Philippi, 1846	潮間帯下部～水深20mの砂泥底
"	"	"	"	シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i> Deshayes in Reeve, 1854	内湾、潮間帯下部～水深20mの砂泥底
"	"	"	"	オオトリガイ	<i>Lutraria maxima</i> Jonas, 1844	内湾、潮間帯～水深10mの砂底
オオノガイ目	Myoida	オオノガイ科	Myoidae	オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i> Makiyama, 1935	干潟、潮間帯の砂泥底

海産貝の和名・学名・棲息環境は奥谷編(2017)、逸見ほか(2012)、波部・小菅(1967)による。

は、ハマグリが約 53%を占め、カガミガイは約 18%、オキシジミは約 7%、マガキは約 4%にすぎない。ハマグリ属に分類したのもハマグリの可能性が高いため、ハマグリの本래の割合は更に多いと思われる。ハマグリは、腹足綱を含めた貝類全体のなかでも出土量が最多であり、本貝塚の主体種である。河川湖沼群集の二枚貝はマツカサガイのみである。感潮域群集のヤマトシジミの出土数量は少ない。

出土した二枚貝綱は食用になる種類であり、大半が食糧残滓とみられる。ただし、貝輪の未製品や破損品などの貝製品関連資料とみられるフネガイ科とタマキガイ科の貝については、貝輪素材として採集されたと考えられる。

2) 貝類以外の無脊椎動物 (表 6・7・10)

棘皮動物門のウニ類、節足動物門のフジツボ類・カニ類が出土している。出土部位と数量を表 7 に示す。

ウニ類は、第 2 次調査の A2、B1、B2、B4 および出土位置不明の資料であり、殻の破片と棘が出土している。暗褐色や灰色・黒色を呈するものが多いが、本来の色合いが不明であるため、焼けているのかどうかははっきりしないものが多い。

フジツボ類は、完形 2 点と破片 1 点のみの出土である。出土位置は不明である。

表 4 腹足綱の出土破片数・最小個体数

	完・略完	殻頂残	殻底残	殻破片	蓋 1/2以上	蓋破片	MNI	NISP
腹足綱目以下不明	-	3	1	46	-	-	-	50
カサガイ目の一種	-	-	-	1	-	-	-	1
マツバガイ	1	-	-	-	-	-	1	1
インダタミ	12	1	10	-	-	-	22	23
エビスガイ	-	-	1	-	-	-	1	1
サザエ	26	21	-	26	77	1	77	151
スガイ	79	2	5	1	1	1	84	88
バテイラ科*	1	-	1	-	-	-	-	2
クボガイ	11	-	1	-	-	-	12	12
ヘソアキクボガイ	1	-	-	-	-	-	1	1
クボガイ類**	6	1	3	1	-	-	-	11
コシダカガンガラ	11	-	2	-	-	-	13	13
オオコシダカガンガラ	36	1	9	4	-	-	45	50
ヒメクボガイ	3	-	-	-	-	-	3	3
アワビ類	-	-	-	12	-	-	-	12
メガイアワビ	-	1	-	2	-	-	1	3
アマオブネガイ科の一種	1	-	-	-	-	-	-	1
コゲツノブエ	5	-	-	-	-	-	5	5
ウミナナ科***	1	-	3	1	-	-	-	5
ウミナナ	6	-	18	-	-	-	24	24
ホソウミナナ	2	1	-	-	-	-	3	3
イボウミナナ	614	9	151	2	-	-	765	776
フトヘナタリ	34	-	48	5	-	-	82	87
ヘナタリ	3	-	2	-	-	-	5	5
カワアイ	1	-	6	-	-	-	7	7
ヘナタリ/カワアイ	-	-	1	-	-	-	-	1
カワニナ	106	-	27	-	-	-	133	133
タニシ類	-	-	3	2	-	-	-	5
オオタニシ	76	2	74	3	-	-	150	155
キクスズメ	1	-	-	-	-	-	1	1
クマサカガイ	1	-	-	-	-	-	1	1
オオヘビガイ	3	-	-	-	-	-	3	3
タマガイ科の一種	2	-	-	1	-	-	-	3
ツメタガイ	60	13	2	4	-	-	73	79
ゴマフダマ	14	-	-	-	-	-	14	14
テングニシ	6	3	11	12	-	-	17	32
バイ	16	-	4	-	-	-	20	20
レイシガイ	29	1	1	-	-	-	30	31
イボニシ	5	-	1	-	-	-	6	6
イボニシ/レイシガイ	9	-	4	-	-	-	-	13
アカニシ	4	5	6	16	-	-	10	31
マクラガイ	1	-	-	-	-	-	1	1
キセルガイ科	-	1	-	21	-	-	-	22
スグヒダキセル	1	-	-	-	-	-	1	1
ベッコウマイマイ科	1	-	-	1	-	-	-	2
ウラジロベッコウ	1	-	-	-	-	-	1	1
ヒメコハクガイの仲間	-	-	1	-	-	-	-	1
コベソマイマイ	-	-	1	-	-	-	1	1
オオベソマイマイの仲間	1	-	-	-	-	-	-	1
キュウシュウシロマイマイ	1	-	-	-	-	-	1	1
マメマイマイの仲間	1	-	-	-	-	-	-	1
セトウチマイマイ	2	-	-	-	-	-	2	2
計							1897	

*ヒメクボガイあるいはコシダカガンガラの可能性があるもの
** 属種不明のクボガイ類
*** 属種不明のウミナナ類

表 5 二枚貝綱の破片数・最小個体数

	左*	右*	破片**	MNI	NISP
二枚貝綱目以下不明	1	3	146	-	150
フネガイ科の一種	-	-	2	-	2
サトウガイ	-	1	-	1	1
クマサルボウ	1	-	-	1	1
サルボウ	6	8	-	8	14
ハゴロモガイ	-	2	-	2	2
ハイガイ	1	1	-	1	2
ベンケイガイ	4	-	2	4	6
イタボガキ科の一種	1	-	-	-	1
マガキ	97	109	44	109	250
イワガキ近似種	-	1	-	1	1
ハボウキガイ科	-	-	1	-	1
イタヤガイ	2	3	-	3	5
マツカサガイ	-	1	-	1	1
マルスタレガイ目	2	1	4	-	7
ヤマトシジミ	13	11	-	13	24
シジミ類(Corbicula属)	5	3	-	5	8
ザルガイ科の一種?	-	-	1	-	1
カガミガイ	444	475	225	475	1144
フカガミ	1	-	-	1	1
アサリ	66	68	25	68	159
オキアサリ/コタマガイ	-	1	1	-	2
オキアサリ	17	6	1	17	24
マツヤマワスレ	2	4	2	4	8
ハマグリ属	30	31	353	31	414
ハマグリ	1528	1612	237	1612	3377
チョウセンハマグリ	13	12	11	13	36
オキシジミ	185	197	74	197	456
マデガイ	19	16	106	19	141
バカガイ科の一種	1	-	-	-	1
バカガイ	-	1	-	1	1
シオフキ	63	67	26	67	156
オオドリガイ	1	2	-	2	3
オオノガイ	-	2	13	2	15
計				6415	

貝製品関連資料も含めた集計結果
* 完形・略完形と殻頂部残を含めた数
** 左右が明らかな殻体破片もここに含む

カニ類は、第2次調査のB2 溝中貝層、表採資料および出土位置不明の資料である。モクズガニの可動指と、ガザミ類に近似する可動指を同定したので、複数種が含まれるようである。カニ類の遺存体は5点中3点が火を受けて灰色や黒色を呈する。

3) 脊索動物門 (表6・7・10)

軟骨魚綱、硬骨魚綱、両生綱、爬虫綱、哺乳綱が出土している。出土部位と数量を表7に示す。

(1) 軟骨魚綱

サメ類の椎骨は第2次調査のB4 貝層中のもので、椎体最大径が28.9mmあることから比較的大型のサメ類である。椎体に切創が観察された。

歯は、第2次調査のB3 西部拡大部貝層中出土資料で、ネコザメの上顎左側あるいは下顎右側の臼歯が遊離したものである。火を受けて灰～黒色を呈する。

(2) 硬骨魚綱

貝殻の窪みに溜まった砂を篩い抽出した微小な魚骨を含む。海産魚類4目5科を同定したが、同定できなかった破片も多数ある。火を受けて黒色や白色を呈するものが多い。

表6 出土した貝類以外の動物

分類	棲息環境・備考					
棘皮動物門 Echinodermata						
ウニ綱 Class Echinoidea	科不明	-	ウニ類	Echinoidea ord., fam., gen., et sp. indet.	-	
目不明	-	-	-	-	-	-
節足動物門 Arthropoda	甲殻上綱 Crustacea					
顎脚綱 Class Maxillopoda	科不明	-	フジツボ類	Balanidae fam., gen., et sp. indet.	-	
目不明	-	-	-	-	-	-
軟甲綱 十脚目 Class Malacostraca Order Decapoda						
短尾下目 Infraorder Brachyura	ガザミ科	Family Portunidae	ガザミ類?	Portunidae gen., et sp. indet. ?	-	
"	イワガニ科	Family Grapsidae	モクズガニ	<i>Eriocheir japonicus</i> De Haan, 1835	各地の河川に棲息し、秋9~10月産卵のため海へ下る	
脊索動物門 Chordata	脊椎動物亜門 Vertebrata					
軟骨魚綱 Class Chondrichthyes	板鰓亜綱 Subclass Elasmobranchii					
目不明	科不明	-	サメ類	Elasmobranchii ord., fam., gen. et sp. indet.	-	
ネコザメ目 Order Heterodontiformes	ネコザメ科	Family Heterodontidae	ネコザメ	<i>Heterodontus japonicus</i> (MacLay and Macleay)	南日本、東シナ海。大陸棚の浅瀬。岩場や藻場を好む	
硬骨魚綱 Class Osteichthyes						
ニシン目 Order Clupeiformes	カタクチイワシ科	Family Engraulidae	カタクチイワシ	<i>Engraulis japonicus</i> (Houttuyn)	日本全域の沿岸域の表層付近に大群で棲息	
ボラ目 Order Mugiliformes	ボラ科	Family Mugilidae	ボラ科の一種	Mugilidae gen., et sp. indet.	-	
スズキ目 Order Perciformes	タイ科	Family Sparidae	クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.	クロダイやキチヌの可能性。内湾や汽水域	
"	"	"	クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegelii</i> (Bleeker)	北海道以南(琉球列島を除く)。内湾、汽水域や沿岸の岩礁	
"	"	"	マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck and Schlegel)	北海道以南~尖閣諸島。水深30~200mの岩礁、砂礫底、砂底	
"	ペラ科?	Family Labridae?	ペラ科の一種?	Labridae gen., et sp. indet.	-	
フグ目 Order Tetraodontiformes	フグ科	Family Tetraodontidae	フグ科の一種	Tetraodontidae gen., et sp. indet.	-	
両生綱 Class Amphibia						
無尾目 Order Anura	科不明	-	カエル類	Anura fam., gen., et sp. indet.	-	
爬虫綱 Class Reptilia						
カメ目 Order Testudines	イシガメ科	Family Geoemydidae	イシガメ属	<i>Mauremys</i> sp.	淡水棲のカメ類(ニホンイシガメあるいはクサガメ)	
哺乳綱 Class Mammalia						
ネコ目 Order Carnivora	イヌ科	Family Canidae	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray, 1834)	北海道、本州、四国、九州といくつかの離島。郊外の住宅地から山地まで広く分布	
"	"	"	イヌ	<i>Canis familiaris</i> (Linnaeus, 1758)	移入種、縄文時代には日本各地に分布。ペットあるいはノイヌ	
"	イタチ科	Family Mustelidae	テン	<i>Martes melampus</i> (Wagner, 1841)	本州、四国、九州、淡路島、対馬。主に森林	
"	ネコ科	Family Felidae	イエネコ	<i>Felis catus</i> (Linnaeus, 1758)	移入種、古墳時代~奈良時代以降に普及。ペットあるいはノネコ	
鯨偶蹄目 Order Cetartiodactyla	イノシシ科	Family Suidae	イノシシ	<i>Sus Scrofa</i> Linnaeus, 1758	ニホンイノシシは本州、四国、九州、淡路島。森林、里山の二次林、農耕地、平野など	
"	シカ科	Family Cervidae	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck, 1838	ホシシウジカは本州、キウシュウジカは四国、九州。森林、草原	
"	ウシ科	Family Bovidae	ウシ	<i>Bos taurus</i> Linnaeus	移入種、古墳時代以降に普及。家畜	
"	科不明	-	クジラ類	Cetartiodactyla fam., gen., et sp. indet.	-	

和名・学名・棲息環境は三宅(1983)、中坊編(2000)、阿部ほか(2005)による。

表7 貝類以外の動物の破片数・最小個体数

分類名 部位	ウニ類	フジツボ類	カニ類	モクズガニ	脊索動物門 綱不明	サメ類	ネコザメ	硬骨魚綱 種類不明	カタクチイワシ?	ボラ科	スズキ目	タイ科	クロダイ属	クロダイ	マダイ	ベラ科?	フグ科	無尾目 カエル類	イシガメ属	哺乳綱 大型	哺乳綱 中々大型	哺乳綱 中小型	タヌキ	イヌ	テン	イエネコ	イノシシ	ニホンジカ	ウシ	ウシ?	クジラ類		
	棘	53	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
殻	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
指節	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
歯	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	4	3	3	-	-	-		
上後頭骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
主上顎骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
主上顎骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
前上顎骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
前上顎骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
歯骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
角骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
角骨	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
方骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
方骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
方骨	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
舌顎骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
舌顎骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
主總蓋骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
主總蓋骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
擬鎖骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
腹椎	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
尾椎	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
椎骨	-	-	-	-	1	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
肋骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
肋骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
肋骨	?	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
鱗棘	-	-	-	-	-	-	20	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
鱗棘/肋骨	-	-	-	-	-	-	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
頭蓋骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	
下顎骨/歯骨	?	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	2	-	-	-	-	
下顎骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	2	-	-	-	-	
下顎骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	0.5	-	2	-	-	-	-	-	
下顎骨	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	9	-	-	-	-		
頸椎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	
胸椎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	
尾椎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
腹甲骨板	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
肩甲骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
肩甲骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
上腕骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
尺骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
寛骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
腸骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大腿骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大腿骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
脛骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
腓骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
足根骨	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
足根骨	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
中足骨	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
基節骨	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
中節骨	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-	-
末節骨	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	-	-	-	23	-	-	39	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	24	13	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
加工角	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	
加工骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	
NISP	54	3	4	1	24	1	1	99	1	1	4	1	10	2	1	15	1	2	1	1	29	15	3	1	1	1							

[ニシン目カタクチイワシ科]

第2次調査のB2上層から、カタクチイワシとカタクチイワシに近似する腹椎が出土した。

[ボラ目ボラ科]

第2次調査のB3西部拡大部貝層中から、ボラ科の一種の主鰓蓋骨が出土した。最小個体数は3体で、推定体長45cm程度の1体と、それより小さい2体である。

[スズキ目タイ科]

クロダイ属、クロダイ、マダイおよび属種不明のタイ科を同定した。出土位置不明の資料もあるが、多くは第2次調査のB3西部拡大部貝層中からの出土である。

マダイは、サイズを考慮して算出した最小個体数は4体である。推定体長55cm程度の個体と、それより大型の個体が含まれる。

[スズキ目ベラ科?]

A2と記された資料中から、ベラ科に近似する尾椎が出土した。体長12.3cmのキュウセン標本より小さい小型魚である。

[フグ目フグ科]

前上顎骨はマフグに近似する。フグ科の一種の骨（部位名称不明）も1点出土している。出土位置は不明である。

(3) 両生綱

ヒキガエルに近似するカエル類の腸骨が出土した。火を受けて黒色を呈する。出土位置は不明である。

(4) 爬虫綱

イシガメ科の一種の腹甲骨板片が出土した。ニホンイシガメかクサガメのどちらかとみられる。火を受けて黒色を呈する。出土位置は不明である。

(5) 哺乳綱

[食肉目（ネコ目）イヌ科]

第2次調査のB3西部拡大部貝層中から、タヌキとイヌが出土した。イヌの第一頸椎（環椎）には、切創のような傷が認められた。火を受けて黒色を呈する。

[食肉目（ネコ目）イタチ科]

第2次調査のB3西部拡大部貝層中から、テンが出土した。火を受けて黒色を呈する。

[食肉目（ネコ目）ネコ科]

イエネコが出土した。歯の咬耗が進行していない若い個体のものである。出土位置は不明である。イエネコは弥生時代以降に移入された動物であり、日本列島に普及したのは古墳時代～奈良時代と考えられているため、古墳時代以降の資料が混入したと考えられる。

[鯨偶蹄目イノシシ科]

イノシシが出土した。肩甲骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨などには解体に伴う切創が確認された。重複部位はないが、骨端部が癒合前の四肢骨（若齢個体）と、咬耗が進んだ切歯（比較的高齢個体）が出土しているため、年齢段階を考慮して最小個体数を2体とした。第2次調査A5、B3西部拡張部、B4の貝層中、および出土位置不明の資料である。

[鯨偶蹄目シカ科]

ニホンジカが出土した。大腿骨、中足骨、基節骨には解体に伴う切創が確認された。年齢段階を考慮して算出した最小個体数は2体である。角片には加工痕跡が確認されたが、完成品はない。B.N.738の中手骨あるいは中足骨は、一部が欠損するため形状は不明だが、刺突具のような骨器である。第2次調査A5、B3表土、

B3 西部拡張部貝層中出土資料、および出土位置不明の資料である。

[鯨偶蹄目ウシ科]

ウシが出土した。骨に切創は確認されない。左下顎の第4小白歯が重複することから、最小個体数は2体である。第2次調査A5、B出土資料、および出土位置不明である。ウシは移入された動物であり、日本列島に普及するのは古墳時代以降である。したがって、古墳時代以降に混入したものと考えられる。

このほかに、「ウシ？」とした大型獣の下顎骨片と肋骨片がある。肋骨片には金属製の刃物による切創が認められることから、後世の資料である。

[鯨偶蹄目クジラ類]

種・部位は不明であるが、クジラ類の骨を加工した骨器の破片が1点出土した。幅27.5mm、厚さ11mm以上の板状に成形されたものである。出土位置は不明である。

4. 資料の検討

1) 貝類利用について

(1) 貝類の生態から推測される貝採集活動

陸産貝類と貝輪素材を除く大半の貝類は食用目的で生きたものを採集したと考えられる。貝類の生態や棲息環境から、採集場所や方法について検討する。

棲息環境別にみた出土破片数の割合を図5に示す。腹足綱はウミナナ類に代表される干潟^[1]や汽水域に棲息するグループ、サザエやバテイラ科に代表される岩礁域に棲息するグループ、オオタニシやカワニナなどの淡水域に棲息するグループが上位を占めることから、河口や沿岸の干潟、磯(岩礁域)、河川湖沼などが主な採集場所であったことがわかる。

ウミナナ類は、潮の引いた干潟を這っているものを容易に採集することができる。イシダタミ、スガイ、バテイラ科の巻貝は、磯の潮間帯で採集できる。オオタニシやカワニナは、湖沼や水深が浅く流れの緩い河川で採集できる。これら出土数量が多い腹足綱は、潜水や特別な道具を必要とせず容易に採集できる種類である。一方、サザエ、アワビ類、テングニシ、バイのようにやや水深の深い場所に棲息するものは、潜水による採集、あるいは餌を入れた籠を沈めて捕獲するなどの方法が想定される。サザエについては、棘の観察が可能な殻26点中18点が無棘タイプであったため、比較的潮流が緩やかな海域環境で生育したものと推測される。

二枚貝綱は、ハマグリやカガミガイに代表される内湾砂底群集が全体の8割を占める。(ハマグリ属と同定したものの大半はハマグリである可能性が高いため、実際の割合はさらに多いとみられる。)次に多いの

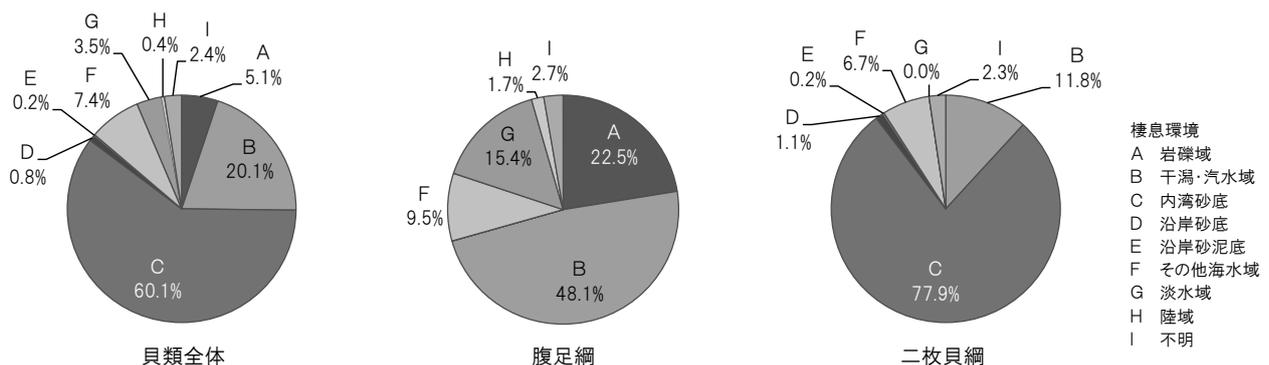


図5 貝類の棲息環境別にみた出土破片数の割合

表8 貝製品関連資料一覧

B.N.	区	遺構等	出土日	貝種	左右	状態	被熱	殻長(mm)	殻高(mm)	備考	写真番号
511	BⅡ	上層	610312	サルボウ	L	殻頂部以外欠損 内孔研磨の有無不明	無	-	-	大型の殻. 貝輪未製品、あるいは破損品か	46
511	BⅡ	上層	610312	ベンケイガイ	R	前縁～腹縁の一部 内孔研磨	無	-	-	貝輪未製品、あるいは破損品か	51
538	BⅢ拡大部	貝層中	610313	フネガイ科 (サトウガイ?)	L	前縁～腹縁の一部 内孔に研磨なし	無	-	-	貝輪未製品、あるいは破損品か	45
723	-	-	-	サトウガイ	R	完形	無	70.9	61.8	加工痕跡なし. 貝輪素材か	48
723	-	-	-	クマサルボウ	L	中央に穿孔 内孔に研磨なし	無	85.5	72.2+	貝輪未製品	42
723	-	-	-	サルボウ	L	中央に穿孔 内孔に研磨なし	無	77.7	68.5	貝輪未製品	43
723	-	-	-	ハマグリ	R	腹縁に連続した細かい打ち欠き	無	80.8	60.4	吉村氏による貝刃としての使用を想定した注記あり	54
723	-	-	-	ベンケイガイ	L	殻頂部～中央部欠損 内孔研磨?	無	約80	-	風化殻. 貝輪未製品の可能性あり	53
723	-	-	-	ベンケイガイ	L	中央欠損(穿孔?)	無	75.5	70.0	貝輪未製品、あるいは破損品か	49
724	-	-	-	サルボウ	R	中央に穿孔 内孔に研磨なし	無	69.5	-	貝輪未製品	44
724	-	-	-	サルボウ	R	殻頂部～中央部欠損 内孔に研磨なし	無	76.7+	-	貝輪未製品、あるいは破損品か	47
724	-	-	-	ベンケイガイ	L	殻頂部～中央部欠損 内孔に研磨なし	無	80.7	-	貝輪未製品か	50
788	-	-	-	ベンケイガイ	L	殻頂部～中央部欠損 内孔研磨の有無不明	無	約87	-	遺物No.A-14. 貝輪未製品、あるいは破損品が*	52

* 澤下(2003)の第9図-3で報告されたもの

はオキシジミやマガキに代表される干潟群集である。このことから、潮間帯や干潟が二枚貝類の主な採集場所だったと考えられる。

ハマグリ、カガミガイ、アサリ、オキシジミ、ヤマトシジミ等は、潮が引いた海岸で簡単な道具を使い掘り出すことができる。やや水深の深い海底に棲息するサトウガイやベンケイガイなどは貝輪素材の可能性があるので、積極的に漁獲したのではなく、岸に打ち上げられた殻を採集したと考えられる。

以上のように、潮待貝塚を残した人々は、潮間帯の砂泥底、河口干潟、磯、淡水域では潜水によらない潮干狩り的な貝類採集をおこない、やや水深の深い場所では潜水漁やバイ籠のような漁具による専門的な貝類採集をおこなっていた可能性がある。貝類全体に占める割合は圧倒的に前者が大きく、老若男女が参加しておこなっていた可能性がある。

(2) 被熱や破損の痕跡

火を受けて色調が灰色などに变化した貝殻は20点以下であり、非常に少ない。殻ごと火で焼くという食べ方はほとんどされていないことがうかがえる。

貝製品関連の資料を表8に示す。この中のフネガイ科の貝とベンケイガイは、貝輪の未製品や破損品などとみられる。殻長70mm前後より大きいサイズの貝殻が素材となっている。今回調査した資料中に、貝輪の完形品は見出せなかった。B.N.723のハマグリ右殻の腹縁には連続した細かい打ち欠き痕が認められた。吉村氏によるメモ書きが殻の表面に残されているように(写真5の54)、貝刃の可能性もある。こうした食用以外の利用が想定される貝類遺存体は13点と少なく、二枚貝綱全体の1%にも満たない。

(3) サイズ

[サザエ]

図6は、サザエの蓋55点の最大径を示したものである。最大径28.0～29.9mmをピークとする山形のグラフとなり、最小値は18.8mm、最大値は41.5mmである。

黒住(2017)によれば、サザエの蓋直径と殻径は強い相関係数を有する。これを参考にすると、蓋サイズから推定される殻径は38～85mmの範囲で、そのなかでも殻径40～70mm程度の小型の個体を中心である。

[イボウミニナ]

図7はイボウミニナ 138 点の殻長を示したものである。最小値は 26.6mm、最大値は 40.1mmで、36.0～37.9mmにピークを持つ山形のグラフとなった。小型の個体为中心である。

[マガキ]

図8はマガキ右殻 48 点の殻長・殻高を示したものである。殻長の最小値は 21.3mm、最大値は 41.5mm、殻高の最小値は 29.1mm、最大値は 127.1mmである。殻長 30mm程度、殻高 40～50mm程度のものが多い。マガキは底質や固着する物により殻形の変異が大きいいため、計測値からサイズを想定するのは難しいが、おおむね小型の個体为中心といえる。左殻には殻長 9.4mm・殻高 17.6mmというかなり小型の個体も含まれている。

[カガミガイ]

図9はカガミガイ右殻 285 点の殻長・殻高を示したものである。殻長の最小値は 44.3mm・最大値は 64.7mm、殻高の最小値は 39.4mm・最大値は 61.7mmである。殻長のピークは 55.0～59.9mm、殻高のピークは 50.0～54.9mmにあり、殻長・殻高ともに 50～60mm程度の個体が多く、比較的小型のものが中心である。

[アサリ]

図10はアサリ右殻 29 点の殻長・殻高を示したものである。殻長の最小値は 28.6mm・最大値は 50.0mm、殻高の最小値は 21.4mm・最大値は 39.0mmである。殻長のピークは 35.0～39.9mm、殻高のピークは 30.0～34.9mmにある。標準的～標準よりやや小型の個体为中心である。

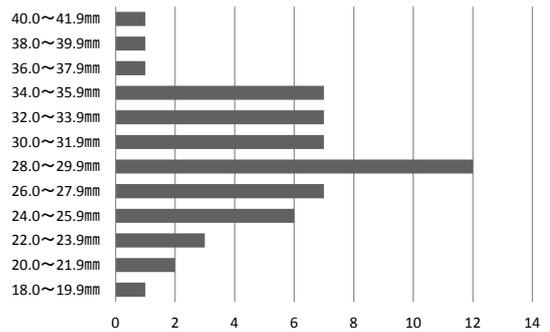


図6 サザエ殻蓋の最大径

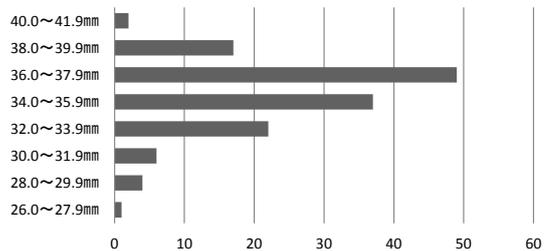


図7 イボウミニナの殻長

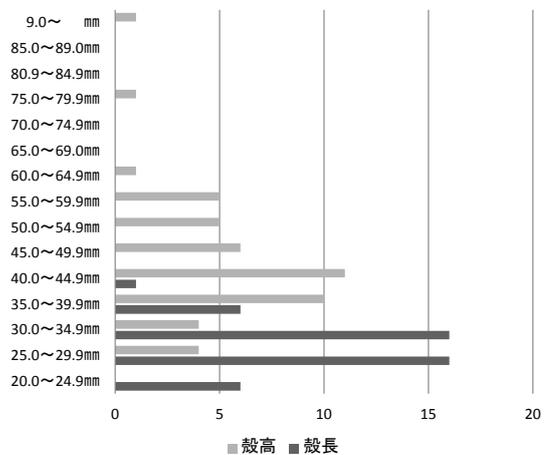


図8 マガキ右殻の殻長・殻高

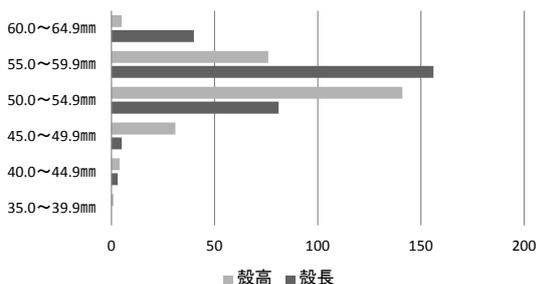


図9 カガミガイ右殻の殻長・殻高

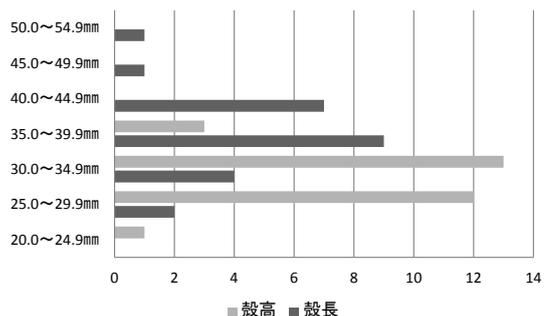


図10 アサリ右殻の殻長・殻高

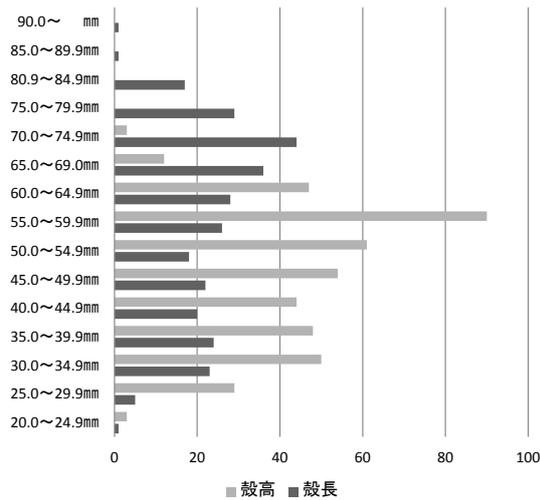


図 11 ハマグリ右殻の殻長・殻高

[ハマグリ]

図 11 はハマグリ右殻 441 点の殻長・殻高を示したものである。サイズのバラつきが大きく、殻長の最小値は 24.7mm・最大値は 97.6mm、殻高の最小値は 22.0mm・最大値は 74.8mm である。殻長は 35.0～39.9mm 前後と 70.0～74.9mm に二つのピークを持つ。殻長が 70mm に満たないものが 2 / 3 以上を占め、小型の個体を中心である。

[オキシジミ]

図 12 はオキシジミ右殻 108 点の殻長・殻高を示したものである。殻長の最小値は 25.6mm・最大値は 46.8mm、殻高の最小値は 26.6mm・最大値は 48.1mm である。殻長・殻高ともに 35.0～39.9mm にピークを持つ。標準よりやや小型の個体を中心である。

[シオフキ]

図 13 はシオフキ左殻 38 点の殻長・殻高を示したものである。殻長の最小値は 35.3mm・最大値は 53.1mm、殻高の最小値は 32.2mm・最大値は 48.1mm である。殻長は 50.0～54.9mm にピークを持ち、標準的サイズの個体を中心である。

以上のように、主要な採集対象種は、標準的サイズより小型の個体が多く採られている。このことから、貝が十分に成長する前に採集してしまうような捕獲圧がかかっていた可能性が考えられる。

2) 貝類以外の動物利用について

(1) 生態と推定サイズから推測される漁撈・狩猟活動

フジツボ類は、貝殻に付着したものが意図せず持ち込まれたと考えられる。

ウニ類、カニ類の推定サイズは、比較標本不足のため不明である。ウニ類・カニ類は出土数量が少ないため、捕獲することがあったとしても、利用頻度は少なかったと推測される。

魚類は岩礁域、沿岸、内湾～汽水域などに棲息する種類が出土した。大型のサメ類・ボラ科・タイ科など比較的大型の種類から、カタクチイワシなどの小型魚まで、様々なサイズのものが出土している。大型の回遊魚は出土していないため、沿岸での漁撈が中心だったと考えられる。ネコザメは岩場の海底に棲息するた

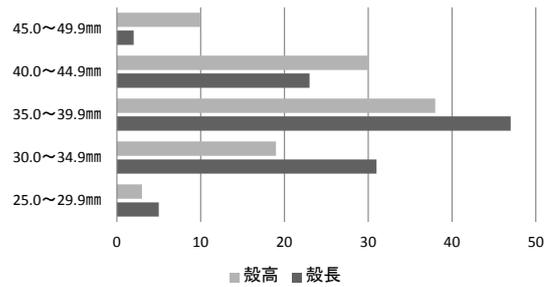


図 12 オキシジミ右殻の殻長・殻高

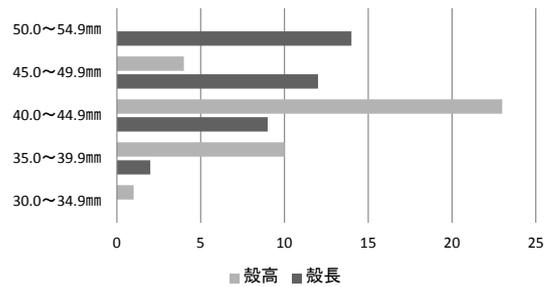


図 13 シオフキ左殻の殻長・殻高

め、潜水して突き取る漁法が想定される。ボラ科やタイ科の魚類は網で獲るほか、突き取りや釣りによる漁などが想定される。群れで沿岸を回遊するカタクチイワシや、ベラ科などの小型魚は、網漁が想定される。

カエル類やイシガメ属は、素手で捕獲することが可能である。出土数量が少ないため、食用に捕獲されたとしても利用頻度は少なかったと推測される。ただし、出土位置不明資料であるため、自然死した遺骸が混入した可能性も否定できない。カエル類は、頭胴長 125mm のヒキガエル標本より大きく、ヒキガエルであれば成体の標準的なサイズといえる。

哺乳綱のうちタヌキ、テン、イノシシ、ニホンジカは貝塚の東側に広がる丘陵部の森林に棲息したと考えられ、罾や弓矢による狩猟によって捕獲したと推測される。中小型の哺乳綱遺存体には、生体サイズを推定できる資料がない。イノシシのうち、比較的高齢個体と推定されるものは、体格の良い成体だったと思われる。ニホンジカは、足根骨などに大型個体のものがみられることから、少なくとも 1 体は体格の良い成体が含まれている。

海生哺乳類のクジラ類の遺存体も出土しているが、骨製品 1 点のみであることから、積極的に捕獲したかどうかは不明である。製品として流通していた可能性や、海岸に打ち寄せられた漂着死体から骨器素材を得ていた可能性もある。

(2) 被熱と破損の痕跡

貝類以外の遺存体のうち、火を受けていたものは全体の約 27% である。魚類遺存体における焼骨の割合は約 36%、両生綱・爬虫綱・哺乳綱遺存体（イエネコ、ウシを含む）における焼骨の割合は約 19% である。このように、一定数の骨が火を受けている状況は、貝殻がほとんど焼けていなかったことと対照的である。

脊椎動物の遺存体にみられる焼骨は、全体や一部が黒色を呈するものが多い。肉の中に埋まっている骨の全体が黒色を呈するほど焼くと、肉も焦げて食べられなくなることが予想されるため、直火で焼く調理法は想定しにくい。調理とは別の目的で焼かれた可能性がある。

魚類のうち、マダイの頭骨・顎骨とサメ類椎骨に切創が認められた。大きな魚は解体して利用したことを示している。

哺乳綱ではイヌ、イノシシ、ニホンジカの遺存体に切創が認められた。イヌは解体された可能性があるが、第 1 頸椎 1 点のみの出土であるため、詳細は不明である。イノシシとニホンジカは四肢骨や指の骨に切創がみられ、解体されて皮や肉が利用されたことを示している。

5. まとめと考察

考古博物館所蔵の潮待貝塚出土動物遺存体を調査して明らかになったことをまとめ、当貝塚における動物利用について若干の考察を加えたい。なお繰り返しになるが、出土地点・層位が不明な資料を多く含むため、ここでは全ての資料を一括して扱っている。

資料の大半を占める貝類の同定をおこない、潮待貝塚の貝層を構成していた貝類の種類と数量を明らかにした。その内容は、腹足綱が約 23%、二枚貝綱が約 77% で、二枚貝が卓越する。出土破片数が多い順にハマグリ、カガミガイ、イボウミニナ、オキシジミ、マガキとなる。中でもハマグリの出土量が突出して多いことから、当貝塚はハマグリを主体とした貝塚である。出土貝類の棲息環境から推定される主要な貝類採集環境は、沿岸潮間帯、河口～干潟、淡水域が想定される。このいずれの環境も、当貝塚を中心とする半径 2km の範囲内に存在しており、貝類という安定した動物質食材を得るのに適した場所に遺跡が営まれていることがわかる。

遺跡所在地の現況は、丘陵から海岸に向かって緩やかに傾斜する土地にあり、最も近い海岸から約 500 m ほど内陸にある。この海岸は、安岡本町の村崎ノ鼻から綾羅木南町の鼻ヅラの間で緩やかな弧を描き、友

田川、梶栗川、綾羅木川などの小河川が響灘へ注ぎこむ。入り組んだ湾や大きな干潟は存在せず、ハマグリやオキシジミが好む地形環境とはいえない。しかしながら、内湾性の貝が多く棲息している事実があり、これについて貝類学の視点からは、「安岡周辺に代表される響灘南部沿岸が、日本海側に位置しながらも、貝類相のうえでは内湾的要素を併せもっている」、「北長門海岸に大きな影響をもたらす対馬暖流は安岡沿岸のかなり沖合に流路をもち、付近の沿岸海域におよぼす影響はさほど強くないことが示唆される」（福田ほか 1992）と解説されている。加えて、当貝塚は縄文時代後期初頭以降の浅海進で形成された海成砂層に乗っており（小野 1975）、海進期の汀線は現状よりも内陸に位置したと考えられるため、縄文時代後期には現在よりも入り組んだ海岸線を形成していたと推測される。海岸線の湾入部や河口部には小規模な干潟が点在し、こうした環境が主要な貝類採集場所になっていたと考えられる。棲息に適した環境の面積が小規模であるため貝類の棲息数が少なく、十分に成長する前の個体をも採集せざるを得なかったのかも知れない。

次に、貝類以外の遺存体から漁撈や狩猟について考えてみたい。出土遺物の検討からは、石鏃や石錘が比較的多く出土することから、狩猟と網漁が活発におこなわれていたことが想定されている（澤下 2003）。更に、「潮待貝塚の立地からは、海岸での生業への依存度が高かったものと推察され」（川崎 2016）ているように、立地環境からも漁撈がある程度の割合を占めていたと想定される。調査の結果、遺存体の内容もその想定を支持する結果となり、出土数量は少ないものの多種類の魚類や陸獣を利用していたことが明らかになった。

魚類はサメ類、タイ科、ボラ科など比較的サイズの大きな魚から、カタクチイワシなどの小型魚まで出土した。山大資料中には、これ以外にウルメイワシ、マイワシ、トビウオ科、スズキ科、アジ科、サバ科、カワハギ科が出土している（沖田 2018）。発掘調査の時に貝層ブロックを篩にかけて微細遺存体回収をしていけば、さらに多くの小型魚が確認された可能性がある。魚類の捕獲法には沿岸での釣り、潜水による刺突漁、網漁等が想定される。骨角製の漁具は出土していないが、刺突具の可能性のある骨器や、加工痕跡のある鹿角が出土しているため、釣針や刺突具を作成・使用していた可能性は十分にある。銚頭のような石器や骨角器の出土はなく、大型回遊魚や海獣類の積極的な狩猟はおこなわれていなかったと考えられる。

陸獣ではイノシシとニホンジカが主要な狩猟対象だったと考えられ、その他にもタヌキやテンのような中小型獣も利用している。陸獣の捕獲には落とし穴等の罠や、弓矢による狩猟が想定される。また、貝層中からイヌの遺存体が出土しており、イヌを飼育して陸獣狩猟に使っていた可能性がある。魚類・陸獣類の骨の出土量が貝殻に比べて少ないのは、これらの廃棄場所が異なっていたことによる可能性もある。

最後に、食用以外の目的で利用されたものとして、貝輪などの貝製品、加工痕跡のあるニホンジカ骨角とクジラ類の骨が出土した。貝輪については、考古博資料にも山大資料にも完成品は見出せず、未製品あるいは破損品と考えられる破片ばかりである^[2]。当貝塚の貝輪（関連資料含む）素材は、フネガイ科のサルボウとクマサルボウ、タマキガイ科のベンケイガイである。海岸に打上げられたこれらの殻を収集し、貝塚の周辺で貝輪作製をおこなっていたと考えられる。ニホンジカの骨角やクジラ類の骨は全国的に骨器素材として良く利用される素材である。今回、考古博資料において刺突具とみられる骨器の一部や加工痕跡の残る骨角が確認でき、潮待貝塚でも骨角器を作製・使用していたことが明らかになった。

おわりに

山大資料に続いて考古博資料の調査をおこない、所在の明らかな潮待貝塚動物遺存体の詳細な内容を報告することができた。便宜上、出土位置不明の資料や、表採の可能性のある資料も一括して扱ったが、表採資料は破壊された貝層に由来する可能性が高いため、ここで報告した動物遺存体の概略が事実から大きく外れることはないと考えている。ただし、考古博資料にはイエネコやウシの骨が含まれており、新しい時期の遺

存体が混在していることが明らかになった。人工遺物についても、山大資料館には潮待貝塚表採資料として須恵器と土師器の破片が収蔵されている（川島 2016）。当貝塚の上層あるいは近隣に古墳時代以降の遺構や遺物包含層が存在したことが推測されるが、宅地開発により貝塚が消滅した現状では確認する手段がないのが残念である。

また、山大資料の報告の際にも指摘したが、過去の報文に列記された動物の分類名に、実際の遺存体で確認できないものが存在する。山大資料・考古博資料を調査し終えた現時点で、「アカエイ」（小野 1961）・「小禽類」（小川 1955）については確認できていない。発掘後に資料が散逸した可能性があるため、情報があれば提供をお願いしたい。

考古博資料と山大資料の貝類遺存体構成を比較すると、主体種がハマグリであり、内湾・干潟・岩礁・淡水に棲息する貝類が多い点は共通するが、若干の違いもみられる。山大資料には、考古博資料に比較的多くみられたカガミガイ、タニシ類、ウミナシ類が皆無か、あってもごくわずかであった。こうした動物の種類や数量の差異が、それらの利用された季節や時期、廃棄単位などの人々の行為の結果であれば、それを読み解くためには出土位置や出土状況等の情報が必要となる。遺跡から出土する動物遺存体の重要性は、動物の入手から廃棄に至るまでの人間の様々な行為とその背景を知り得るところにあり、貝塚はそういった情報の宝庫と言える遺跡である。そのため、細かく分層した貝層単位での発掘や、コラムサンプルによる微細遺物採取が、現在では一般的な調査手法である（小宮 2015）。今後、そうした調査手法による遺跡の調査が山口県域においておこなわれ、より詳細な人類の生活の実態に迫る成果が得られることが切望される。

謝辞 下関市立考古博物館には貴重な資料の調査を許可して頂きました。下関市立豊田ホテルの里ミュージアムの増野和幸館長には、陸産貝類を同定して頂きました。貝殻・魚骨の同定に際し、萩博物館の堀成夫氏、下関市立しものせき水族館海響館の萩本啓介氏、久志本鉄平氏、いわき短期大学の山崎京美先生、帝京大学の植月学先生に御助言・御協力を頂きました。感謝申し上げます。

注

[1] 逸見ほか（2012）によれば、沿岸域のうち、潮の干満によって、満潮時には冠水し干潮時には干出することを繰り返す海岸の範囲を潮間帯という。潮間帯のうち、外海から遮断された河口域を含む内湾的な環境で、泥や砂、礫など流動性のある底質からなる平坦な場所を干潟という。

[2] これまでに、山大資料館に保管された資料からは、ベンケイガイ貝輪片 1 点とフネガイ科の破片（貝輪未製品？）が 3 点（川崎 2016）、フネガイ科製貝輪片 1 点（沖田 2018）が報告されている。考古博物館に保管された資料からは、ベンケイガイ貝輪片 1 点が報告されている（澤下 2003）。この考古博物館所蔵ベンケイガイ貝輪片は、今回調査した資料に含まれる（表 8 参照）。なお、実見していないが、『城下町長府の文化－長府博物館五十年の歩み－』（1983 年、長府博物館五十年史編集委員会）P21 には、潮待貝塚出土品として完形のタマキガイ科貝輪 1 点が紹介されている。

参考・引用文献

- 1 東 正雄 1995 『原色日本陸産貝類図鑑（増補改訂版）』保育社.
- 2 阿部 永ほか 2005 『日本の哺乳類（改訂版）』（財団法人 自然環境研究センター編）東海大学出版会.
- 3 網尾 勝 1981 綾羅木郷台地遺跡出土の貝. 『綾羅木郷遺跡 発掘調査報告 I』下関市教育委員会：498-503.
- 4 逸見泰久ほか 2012 『干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブッカー』（日本ベントス学会編）東海大学出版会.
- 5 伊藤照雄 2000 潮待貝塚. 『山口県史 資料編 考古 1』山口県：171-172.
- 6 小川五郎 1955 山口県下ノ関市潮待貝塚. 『日本考古学年報 3』（日本考古学協会編纂）誠文堂新光社：64-65.
- 7 沖田絵麻 2018 下関市潮待貝塚出土の動物遺存体. 『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要 第 13 号』土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム：51-76.
- 8 奥谷喬司編 2017 『日本近海産貝類図鑑（第二版）』東海大学出版部.
- 9 小野忠熈 1961 潮待貝塚. 『山口県文化財概要第 4 集 埋蔵文化財』山口県教育委員会：66-71.
- 10 小野忠熈 1975 考古地理学からみた響灘沿岸の砂質海岸の形成. 『第四紀研究』14-4：239-249.
- 11 川島尚宗 2016 潮待貝塚出土資料調査報告. 『館蔵資料調査研究報告書 5 見島ジーコンボ古墳群第 124 号墳・潮待貝塚 出土資料調査報告』（山口大学埋蔵文化財資料館編）山口大学：29-47.
- 12 黒住耐二 2017 近現代の”地点貝塚”から得られた貝類遺体の情報—能登半島福浦港の一例—. 『千葉県立中央博物館研究報告（人文科学）第 13 巻第 2 号』千葉県立中央博物館.
- 13 小宮 孟 2015 『考古学研究調査ハンドブック⑤ 貝塚調査と動物考古学』同成社.
- 14 澤下孝信 2000 下関市域出土資料の研究 1—下関市潮待貝塚の遺物 1—. 『研究紀要 第 4 号』下関市立考古博物館：41-52.
- 15 澤下孝信 2003 下関市域出土資料の研究 2—下関市潮待貝塚の遺物 2—. 『研究紀要 第 7 号』下関市立考古博物館：25-35.
- 16 富岡直人 1999 貝類. 『考古学と自然科学 2 考古学と動物学』（西本豊弘・松井 章編）同成社：89-117.
- 17 富岡直人ほか 2002 脊椎動物遺存体画像と切創に関するデータベース構築. 『日本文化財科学会第 19 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会：170-171.
- 18 中坊徹次編 2000 『日本産魚類検索 全種の同定（第二版）』東海大学出版会.
- 19 波部忠重・小菅貞男 1967 『標準原色図鑑全集 第 3 巻貝』保育社.
- 20 福田 宏ほか 1992 『概説 山口県の貝類』（三時輝久編）山口県立山口博物館.
- 21 湊 宏 1988 『日本陸産貝類総目録』日本陸産貝類総目録刊行会.
- 22 三宅貞祥 1983 『原色日本大型甲殻類図鑑 II』保育社.
- 23 山本一郎編 1972 『山口県下関市 神田遺跡 第二次発掘調査概報』山口県教育委員会.
- 24 吉村次郎 1965 潮待貝塚. 『下関市史 原始—中世』（下関市市史編修委員会編）下関市役所：104-114.
- 25 Driesch, Angela von den 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Site. Peabody Museum Bulletin 1, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.

(表9つづき)

ラベル内容		分類	合員				右 骸体				左右不明		蓋	被熱	色		
B.N.	区		完/略完	左/左右なし	骸体	骸底部	骸体片	完/略完	骸頂部	骸底部	骸体片	破片				1/2以上	1/2以下
555	-	61	腕足綱	イシダタミ	1										無	-	
555	-	61	腕足綱	オオベソマイの仲間		1									無	-	
555	-	61	腕足綱	クボガイ	1										無	-	
555	-	61	腕足綱	サザエ								1			無	-	
555	-	61	腕足綱	ヘソアキクボガイ	1										無	-	
555	-	61	腕足綱	マツハガイ	1										無	-	
556	-	61	二枚貝綱	アサリ							1				無	-	
556	-	61	二枚貝綱	オキシジミ	4			1							無	-	
556	-	61	二枚貝綱	チョウセンハマグリ	1										無	-	
556	-	61	二枚貝綱	ハマグリ		5	3				6	1			無	-	
556	-	61	二枚貝綱	フネガイ科						1					無	-	
556	-	61	二枚貝綱	マガキ	1										無	-	
556	-	61	二枚貝綱	マルスタレガイ目	2							2			無	-	
556	-	61	腕足綱	オオコシダカガンガラ	2			1							無	-	
556	-	61	腕足綱	カウニナ	4										無	-	
556	-	61	腕足綱	コシダカガンガラ				1							無	-	
556	-	61	腕足綱	サザエ	4										無	-	
556	-	61	腕足綱	フトヘナタリ	1										無	-	
556	-	61	腕足綱	ベッコウマイマイ科	1					1					無	-	
556	-	61	腕足綱	マメマイマイの仲間	1										無	-	
556	-	61	腕足綱	レイシガイ	3										無	-	
557	-	61	腕足綱	テングニシ						2					無	-	
723	-	-	二枚貝綱	アサリ	1						1				無	-	
723	-	-	二枚貝綱	イタヤガイ	1										無	-	
723	-	-	二枚貝綱	オオトリガイ	1										無	-	
723	-	-	二枚貝綱	オオノガイ						1					無	-	
723	-	-	二枚貝綱	オキアサリ	1										無	-	
723	-	-	二枚貝綱	オキシジミ							1				無	-	
723	-	-	二枚貝綱	カガミガイ	1						1				無	-	
723	-	-	二枚貝綱	シオフキ	1										無	-	
723	-	-	二枚貝綱	チョウセンハマグリ						2					無	-	
723	-	-	二枚貝綱	ハイガイ						1					無	-	
723	-	-	二枚貝綱	ハボウキガイ科								1			無	-	
723	-	-	二枚貝綱	ハマグリ	1	1	1				1				無	-	
723	-	-	二枚貝綱	ペンケンイガイ								1			無	-	
723	-	-	二枚貝綱	マガキ											無	-	
723	-	-	二枚貝綱	マツカサガイ							1				無	-	
723	-	-	二枚貝綱	マテガイ							2				無	-	
723	-	-	腕足綱	アカニシ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	イシダタミ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	イボウミナ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	クマサカガイ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	ウミナ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	オオコシダカガンガラ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	オオヘビガイ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	カウニナ	2										無	-	
723	-	-	腕足綱	サザエ	1	1							1		無	-	
723	-	-	腕足綱	スガイ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	タマガイ科 Natica属	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	ツメタガイ	2										無	-	
723	-	-	腕足綱	テングニシ	1			1		2					無	-	
723	-	-	腕足綱	バイ	2					2					無	-	
723	-	-	腕足綱	オオタニシ					1						無	-	
723	-	-	腕足綱	フトヘナタリ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	マクラガイ	1										無	-	
723	-	-	腕足綱	メガイアワビ		1									無	-	
723	-	-	腕足綱	レイシガイ	2										無	-	
727	-	-	腕足綱	ツメタガイ	1										無	-	
728	-	-	腕足綱	アワビ類						2					無	-	
729	-	27.1.3	二枚貝綱	オキシジミ	2										無	-	
730	-	-	二枚貝綱	ハマグリ		1						2			無	-	
730	-	-	二枚貝綱	ハマグリ属								1			無	-	
731	-	-	腕足綱	サザエ		1									無	-	
732	-	-	腕足綱	スガイ	1										無	-	
733	-	-	二枚貝綱	イタヤガイ						1					無	-	
734	-	-	二枚貝綱	マガキ								1			無	-	
735	-	-	腕足綱	レイシガイ	2										無	-	
736	-	-	二枚貝綱	チョウセンハマグリ								1			無	-	
738	-	-	腕足綱	不明 大型巻貝						1					有	△	
740	-	-	二枚貝綱	ヤマトンジミ						1					無	-	
741	-	-	腕足綱	ハナタリ	1										無	-	
742	-	-	腕足綱	イシダタミ	2										無	-	
743	-	-	腕足綱	カウニナ	2										無	-	
744	A 10T	-	二枚貝綱	オキシジミ	1										無	-	
745	A	-	二枚貝綱	アサリ	1										無	-	
746	A	-	二枚貝綱	ハイガイ	1										無	-	
747	-	-	腕足綱	コシダカガンガラ	2										無	-	
748	-	-	腕足綱	フトヘナタリ	2										無	-	
749	-	-	二枚貝綱	シジミ類	1						1				無	-	
750	-	-	腕足綱	クボガイ	2										無	-	
751	-	-	腕足綱	ウミナ類	1										無	-	
751	-	-	腕足綱	ヘナタリ	1										無	-	
752	-	-	腕足綱	イボニシ/レイシガイ	2										無	-	
753	-	-	腕足綱	スガイ	3										無	-	
756	-	-	二枚貝綱	オオノガイ?								1			無	-	
757	-	-	二枚貝綱	ザルガイ科?								1			無	-	
758	-	-	二枚貝綱	アサリ								1			無	-	
758	-	-	二枚貝綱	カガミガイ	4					4			3		無	-	
758	-	-	二枚貝綱	ハマグリ	3	3	1			1			2		無	-	
758	-	-	二枚貝綱	フカカガミ	1										無	-	
758	-	-	二枚貝綱	マガキ	4					9			1		無	-	
758	-	-	二枚貝綱	マテガイ		15					7		65		無	-	
758	-	-	腕足綱	アカニシ						3					無	-	
758	-	-	腕足綱	アワビ類						1					無	-	
758	-	-	腕足綱	イボウミナ	47	3	150								有・無	◇	
758	-	-	腕足綱	カウニナ	10										無	-	
758	-	-	腕足綱	オオベソマイ				1							無	-	
758	-	-	腕足綱	タマガイ科 Natica属	1										無	-	
758	-	-	腕足綱	ツメタガイ	3										無	-	
758	-	-	腕足綱	バイ					1						無	-	
758	-	-	腕足綱	オオタニシ	8	2	53								無	-	
758	-	-	腕足綱	フトヘナタリ	4										無	-	
758	-	-	腕足綱	不明		1				8					無	-	
760	-	-	二枚貝綱	アサリ	1	1									無	-	
760	-	-	二枚貝綱	オオノガイ						5	2		4		2	無	-
760	-	-	二枚貝綱	オキシジミ											1	無	-
760	-	-	二枚貝綱	カガミガイ	5	77				5	96				217	無	-
760	-	-	二枚貝綱	シオフキ		9				7					23	無	-
760	-	-	二枚貝綱	ハマグリ	7	96				9	95				143	無	-
760	-	-	二枚貝綱	マガキ	6	9				3	15	7	1		9	無	有▲
760	-	-	二枚貝綱	マツヤマワスレ	1	4				1	1		2			無	-
760	-	-	二枚貝綱	マテガイ							6				41	無	-
760	-	-	二枚貝綱	不明											26	無	-
760	-	-	腕足綱	アカニシ	1	4			11							無	-
760	-	-	腕足綱	イボウミナ	28											無	-
760	-	-	腕足綱	カウニナ	2				4							無	-
760	-	-	腕足綱	タニシ類					2	2						無	-
760	-	-	腕足綱	ツメタガイ	2	8				4						無	-
760	-	-	腕足綱	オオタニシ	2				4							無	-
760	-	-	腕足綱	フトヘナタリ					2							無	-
760	-	-	腕足綱	不明						1						無	-

(表8)に示した資料は除く)

【色調】:-:変化なし ▲:一部黒色 △:一部灰色 ◇:灰色

表 10 調査資料同定結果一覧：貝類以外

BN	No	区	遺構等	出土日	分類	部位	L/R	部分	破損	被熱	色調	数量		
005	-	-	表採	-	哺乳綱	ウシ		下顎第1切歯	L	略完形	無	-	1	
014	A-5~13	-	表面採集	51	ウニ綱	ウニ類		棘	-	破片	有?	◇	10	
014	A-1~4	-	表面採集	51	硬骨魚綱	不明		鱗棘	-	基部	有?	▲	1	
014	A-1~4	-	表面採集	51	硬骨魚綱	タイ科?		遊離歯	?	歯冠	有?	◇	1	
014	A-1~4	-	表面採集	51	軟甲綱	カニ類		棘脚の指節・可動指	?		無?	-	2	
014	A-1~4	-	表面採集	51	軟甲綱	カニ類		可動指 指節	?	遠位端~遠位部	有?	◇	1	
191	-	-	-	5008	硬骨魚綱	フクロ		前上頭骨	L	略完形	無	-	1	
191	-	-	-	5008	哺乳綱	イノシシ		末節骨 IV	L	完形	無	-	1	
191	-	-	-	5008	哺乳綱	不明 大型獣		不明	?	骨体片	無	-	1	
221	-	-	-	5008	哺乳綱	イノシシ		中節骨 III or IV	?	完形	無	-	1	
221	-	-	-	5008	哺乳綱	ニホンジカ		頭蓋骨 側頭骨	L	関節結節付近の破片	無	-	1	
221	-	-	-	5008	哺乳綱	ニホンジカ		上腕骨	L	三角筋粗面部分の骨幹破片	無	-	1	
246	-	-	-	5008	爬虫綱	インガメ属		腹甲骨板	?	破片	有	●	1	
247	-	-	-	5008	哺乳綱	ウシ		不明	?	骨体片	有	▲	1	
357	-	-	-	5008	硬骨魚綱	マダイ		上後頭骨	-	後部	無	-	1	
357	-	-	-	5008	哺乳綱	不明 大型獣		不明(四肢骨?)	?	骨幹部片	無	-	1	
358	-	-	-	5008	ウニ綱	ウニ類		棘	-	近位端1, 遠位端1	有	●	2	
361	-	-	-	5008	ウニ綱	ウニ類		棘	-	破片	無	-	1	
373	-	-	-	5008	硬骨魚綱	不明		尾椎	M	椎体	有	●	1	
374	-	-	-	5008	ウニ綱	ウニ類		棘	-	遠位端	有	◇	1	
428	A2	-	-	3.12	ウニ綱	ウニ類		棘	-	破片	有?	◇	5	
428	A2	-	-	3.12	-	-		種実?	-	-	有	●	2	
428	A2	-	-	3.12	硬骨魚綱	ベラ科?		尾椎	M	椎体	無	-	1	
428	A2	-	-	3.12	硬骨魚綱	不明		方骨?	?	関節部	無	-	1	
428	A2	-	-	3.12	硬骨魚綱	不明		角骨?	?	破片	無	-	1	
428	A2	-	-	3.12	硬骨魚綱	不明		不明	-	不明	無	-	1	
428	A2	-	-	3.12	綱不明	-		不明	-	破片	有	●◎	3	
428	A2	-	-	3.12	綱不明	-		不明	-	破片	無	-	1	
428	A2	-	-	3.12	両生綱 or 爬虫綱?	-		下顎骨 or 歯骨	L	完形	無	-	1	
442	-	A5	-	610314	哺乳綱	不明 中~大型獣		頭蓋骨	-	破片	無	-	1	
443	-	A5	-	610315	硬骨魚綱	マダイ		上後頭骨	-	破片	有	●	1	
443	-	A5	-	610315	硬骨魚綱	クロダイ		前上頭骨	L	略完形	有	◎	1	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	イノシシ		下顎骨	L/R	下顎連合部	有	◎◎	1	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	イノシシ		大腿骨	R	遠位端 内側~後面	有	◎	1	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	イノシシ		踵骨	R	遠位端 破片	無	-	1	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	ニホンジカ		角	?	不明	有?	▲	1	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	ウシ		下顎骨	R	横間線	無	-	1	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	ウシ?		下顎骨	?	骨体片	無	-	9	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	不明 大型獣		肋骨	?	骨幹部片	有?	▲	1	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	不明 大型獣		不明	-	骨体片	無	-	4	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	不明 大型獣		不明(四肢骨?)	?	骨幹部片	有?	◎	2	
443	-	A5	-	610315	哺乳綱	不明 大型獣		不明	-	破片	有?	◎	1	
463	-	B1	褐色砂層	-	哺乳綱	不明 大型獣		不明	?	骨体片	無	-	1	
473	-	B3	西浜 旧溝	-	哺乳綱	不明 大型獣		不明(扁平骨)	?	骨体片	無	-	1	
479	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ		角	?	角核	無	-	1	
479	-	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣		不明	?	骨体片	無	-	1	
482	-	-	-	500204	哺乳綱	ニホンジカ		大腿骨	R	遠位端 外側顆	無	-	1	
482	-	-	-	500204	哺乳綱	不明 大型獣		不明(四肢骨)	?	骨幹部片	無	-	1	
484	-	B	-	61	哺乳綱	ウシ		下顎骨	L	骨体 臼歯歯槽部	無	-	1	
486	-	-	-	61	哺乳綱	ウシ		下顎骨	L	骨体 筋突起~関節突起	無	-	1	
502	-	B1	表土	610312	ウニ綱	ウニ類		棘	-	破片	有?	◎	1	
502	-	B1	表土	610312	綱不明	-		不明	-	破片	有?	◎	7	
502	-	B1	表土	610312	哺乳綱	不明		歯	?	歯冠片	有?	○	1	
507	-	B2	攪乱層	610312	硬骨魚綱	不明		不明	-	破片	有	●	6	
511	-	B2	上層	610312	硬骨魚綱	カタクチイワシ		腹椎	M	椎体	有	●	1	
511	-	B2	上層	610312	硬骨魚綱	カタクチイワシ?		腹椎	M	椎体	無	-	1	
511	-	B2	上層	610312	硬骨魚綱	不明		椎骨	M	椎体破片	無	-	2	
511	-	B2	上層	610312	硬骨魚綱	不明		鱗棘, 肋骨など	-	破片	有・無	◎◎	5	
513	-	B2	貝層中	-	ウニ綱	ウニ類		棘	-	破片	有?	◎	2	
516	-	B2	溝中貝層	610314	綱不明	-		不明	-	破片	有	●	3	
517	-	B2	溝中貝層	610314	硬骨魚綱	不明		尾椎	M	椎体	有	●	1	
517	-	B2	溝中貝層	610314	軟甲綱	カニ類		棘脚の指節	?	破片	有	○	1	
530	-	B2	2区溝中 灰色砂層	610315	哺乳綱	不明 大型獣		不明(四肢骨)	?	骨幹部片	無	-	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	ボラ科		主鰓蓋骨	L	前位部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	ボラ科		主鰓蓋骨	R	前位部	有	●	2	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	クロダイ属		前上頭骨	L	骨体片	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	マダイ		主上頭骨	L	骨体中央部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	マダイ		主上頭骨	L	骨体片	有	●	2	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	マダイ		主上頭骨	R	骨体中央部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	マダイ		主上頭骨	R	骨体中央部	有	●	3	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	マダイ		前上頭骨	L	骨体	有	●	2	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	マダイ		前上頭骨	R	骨体中央部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	タイ科		遊離歯	?	歯冠	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	タイ科		歯骨	L	骨体片	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	タイ科		方骨	L	前位部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	タイ科		方骨	R	前位部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	タイ科		舌骨	R	上~前位部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	タイ科		舌骨	L	上~前位部	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	不明		椎骨	-	椎体片	有	●	3	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	不明		鱗棘/肋骨	?	破片	有	●	9	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	不明		不明	?	破片	有	●	7	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	不明		第1椎骨	M	椎体	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	軟骨魚綱	エナ		歯	-	骨	有	◇	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	ゾウ		大腿骨	L	遠位端~遠位部	切創(D1a)	有	◎	1
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	タヌキ		下腿骨	R	骨体片 P3~M1歯槽	有	◎	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	イヌ		第一頸椎	-	ほぼ完形	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	不明 中小獣		肋骨	R	骨体片	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	不明 中小獣		不明(四肢骨?)	?	骨幹部片	有	●	2	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	イノシシ ♂		下顎犬歯	L	歯冠片	有	◎	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	イノシシ		尺骨	R	骨幹部片	有	●	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	ニホンジカ		踵骨	R	ほぼ完形	無	-	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	ニホンジカ		中心第4足根骨	L	ほぼ完形	無	-	1	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	不明 中~大型獣		不明	?	骨体片	無	-	3	
534	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	哺乳綱	不明 大型獣		不明	?	骨体片	無	-	4	
540	-	BIII西部拡大部	貝層中	610315	硬骨魚綱	不明		不明	?	破片	有	●	2	
541	-	B3	溝中 褐色層	610315	哺乳綱	不明 中~大型獣		不明	?	骨体片	無	-	1	
543	-	BIII西部拡大部	旧溝中攪乱層	610315	哺乳綱	ニホンジカ		頰椎(第3~7のいずれか)	-	右後関節突起~椎体	無	-	1	
543	-	BIII西部拡大部	旧溝中攪乱層	610315	哺乳綱	不明 大型獣		不明	-	骨端部片	無	-	1	
544	-	BIII西部拡大部	旧溝中攪乱層	610315	硬骨魚綱	不明		不明	-	破片	有	●	3	
548	-	BIII西部拡大部	旧溝中貝層下に続く黒色砂層	-	硬骨魚綱	ボラ科		主鰓蓋骨	L	前位部	有	●	1	
548	-	B3西部拡大部	旧溝中貝層下に続く黒色砂層	-	硬骨魚綱	マダイ		上後頭骨	-	左側後半部~下部	有	○	1	
548	-	B3西部拡大部	旧溝中貝層下に続く黒色砂層	-	硬骨魚綱	タイ科		角骨	R	後位部	有	▲	1	
548	-	B3西部拡大部	旧溝中貝層下に続く黒色砂層	-	硬骨魚綱	タイ科		主鰓蓋骨	R	前半部	有	●	1	
548	-	B3西部拡大部	旧溝中貝層下に続く黒色砂層	-	硬骨魚綱	不明		不明	?	破片	有	▲	2	
548	-	B3西部拡大部	旧溝中貝層下に続く黒色砂層	-</										

(表 10 つづき)

BN	No.	区	遺構等	出土日	分類	部位	L/R	部分	破損	被熱	色調	数量	
552	-	B4	貝層中	610314	軟骨魚綱	サマ類	-	椎骨	切創D1a、D2a	無	-	1	
552	-	B4	貝層中	610314	哺乳綱	インシシ	歯牙	？	臼歯 歯冠片	？	-	1	
552	-	B4	貝層中	610314	哺乳綱	インシシ	中節骨 III or IV	？	遠位部～遠位端	有	○	1	
552	-	B4	貝層中	610314	哺乳綱	インシシ	脛骨	L	近位部	外側後面に切創C2a	無	-	1
553	-	B4	貝層中	610314	ウニ類	殻体	-	破片	有？	◎	-	1	
553	-	B4	貝層中	610314	硬骨魚綱	不明	鱗棘	-	破片	有	●	2	
553	-	B4	貝層中	610314	網不明	-	不明	-	破片	有	◇	1	
553	-	B4	貝層中	610314	網不明	-	不明	-	破片	無	-	4	
554	-	B4	貝層中	610314	硬骨魚綱	不明	産椎	-	椎体	有	○	1	
554	-	B4	貝層中	610314	硬骨魚綱	不明	産椎	-	椎体	有	◎	1	
556	-	-	-	61	硬骨魚綱	不明	椎骨	-	椎体	無	◎	1	
556	-	-	-	61	硬骨魚綱	不明	椎骨	-	椎体片	無	◎	2	
556	-	-	-	61	硬骨魚綱	スズキ目	擬鰓骨	R	上端部片	無	-	1	
556	-	-	-	61	硬骨魚綱	不明	鱗棘	-	破片	有・無	●・◎	7	
556	-	-	-	61	硬骨魚綱	不明	不明	-	破片	無	◎	3	
556	-	-	-	61	網不明	-	不明	-	破片	無	◎	5	
721	-	-	-	1970.2.4	哺乳綱	ウシ？	肋骨	L	骨体片	切創C1a・C1b、嚙痕Y-2	無	-	1
726	-	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣	歯牙	？	歯冠片	有	◇	1	
737	A-16	-	-	-	ウニ類	ウニ類	-	完全、破片	有	◎◎	31		
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	タイ科	主上頭骨	R	前位端部片	有	●	1	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	クロダイ属	第2背鱗棘	M	完形	無	-	1	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	タイ	前上頭骨	L	骨体	有	▲	1	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	マダイ	前上頭骨	L	骨体	無	-	1	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	不明	歯	？	歯冠片	？	-	1	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	不明	鱗棘	-	近位端残	有・無	●・-	9	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	不明	肋骨	-	近位端残	無	-	2	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	不明	鱗棘/肋骨	-	骨幹部片	有・無	●・-	8	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	不明	不明	-	破片	有・無	▲・-	12	
737	A-16	-	-	-	硬骨魚綱	フグ科	名称不明	R	略完形	有	-	1	
737	A-16	-	-	-	両生綱	カエル目	鰓骨	R	関節周辺	有	●	1	
737	A-16	-	-	-	哺乳綱	インシシ	上顎歯 I1	L	遠心部破片	無	-	1	
737	A-16	-	-	-	哺乳綱	インシシ	上顎歯 I3	L	完形	無	◎	1	
737	A-16	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣	歯	？	歯根片	有	◎	1	
737	A-16	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣	肋骨	？	骨幹部片	有	●	1	
737	A-16	-	-	-	哺乳綱	不明 中～大型獣	不明	-	骨端片	有	-	1	
737	A-16	-	-	-	哺乳綱	不明 中～大型獣	不明	-	不明 破片	無	-	6	
737	A-16	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣	不明	-	骨体片 or 角片	有	▲	1	
737	A-16	-	-	-	軟甲綱	モズガニ	可動指 指節	？	略完形	有	◎	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	イネコ	下顎骨	R	略完形	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	頭蓋骨	M	底線形骨	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	第2頸椎	M	破片	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	胸椎	M	略完形	有	◎	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	胸椎	M	棘突起片	有	●	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	肩甲骨	L	骨体内側～遠位端	切創D1a、嚙痕Y-2	無	-	1
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	肩甲骨	R	骨体片	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	寛骨	R	寛骨臼とその周囲	切創D1a	有	▲	1
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	膝骨	R	遠位部～遠位端	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	中足骨 III or IV	？	遠位部～遠位端	有	○	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	インシシ	中節骨 III or IV	？	完形	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	頭蓋骨	M	底線形骨	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	上顎歯 P3	R	略完形	有	▲	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	L	近位部 後面	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	？	骨幹部片	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	基節骨 III or IV	？	完形	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	中節骨 III or IV	？	完形	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ウシ	下顎歯 P2	R	略完形	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ウシ	下顎歯 P4	L	略完形	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣	頭蓋骨	M	不明 破片	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣	不明 四肢骨	？	骨幹部片	スバイラル割れ	無	-	1
738	-	-	-	-	哺乳綱	不明 大型獣	不明	？	破片	無	-	1	
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	角	？	角幹部	加工(切断・成形・えぐり)	有	○	1
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	角	？	不明 破片	加工(切断・えぐり)	有	○▲	1
738	-	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨 or 中足骨	？	骨幹部片	加工(成形・研磨)	有	-	1
739	A-18	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	下顎歯 P3	R	略完形	無	-	1	
758	-	-	-	-	顎脚綱	フジツボ類	殻体	-	完形、破片	無	-	2	
760	-	-	-	-	顎脚綱	フジツボ類	殻	-	完形	無	-	1	
789	A-15	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	上顎歯 M3	R	略完形	無	-	1	
789	A-15	-	-	-	哺乳綱	ニホンジカ	下顎歯	R	骨体(M2-M3補立)	無	-	1	
789	A-15	-	-	-	哺乳綱	ウシ	下顎歯	R	骨体(P2～M2部分)	無	-	1	
(なし)	-	BⅢ	表土	610313	哺乳綱	ニホンジカ	下顎歯	R	M3と骨体片	無	-	1	

【色調】:変化なし ○:白色/一部白色 ◇:灰色 ●:黒色 ▲:一部黒色 ◎:暗褐色/一部暗褐色



1. イシダタミ^{*1} (B.N.233)



2. サザエ^{*2} (B.N.723)



3. スガイ^{*1} (B.N.723)



4. オオコシダカガンガラ^{*2} (B.N.723)



5. ヒメクボガイ^{*1} (B.N.364)



6. メガイアワビ^{*2} (B.N.723)



7. ホソウミニナ^{*1} (B.N.235)



8. イボウミニナ^{*1} (B.N.758)



9. フトヘナタリ^{*1} (B.N.758)



10. ヘナタリ^{*1} (B.N.741)



11. カワイイ^{*1} (B.N.235)

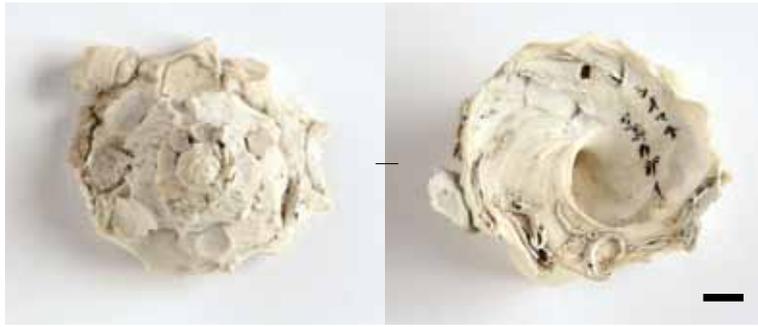


12. カワニナ^{*1} (B.N.723)



13. オオタニシ^{*1} (B.N.758)

スケール ^{*1}: 5mm ^{*2}: 10mm



14. クマサカガイ (B.N.723)



15. オオヘビガイ (B.N.723)



16. ツメタガイ (B.N.239)



17. テングニシ (B.N.723)



18. テングニシ (B.N.723)



19. バイ (B.N.723)



20. レイシガイ (B.N.723)



21. アカニシ (B.N.723)



22. マクラガイ (B.N.723)

スケール 10mm



23. スグヒダギセル^{*1}
(B.N.502)



24. ウラジロベッコウ^{*1} (B.N.442)



25. オオベソマイマイの仲間^{*1} (B.N.555)



26. キュウシュウシロマイマイ^{*2}
(B.N.442)



27. セトウチマイマイ^{*2} (B.N.442)



28. マガキ 左殻^{*3} (B.N.242)



29. イワガキ近似種 右殻^{*3} (B.N.244)



30. イタヤガイ 右殻^{*3} (B.N.733)



31. B.N.733 のイタヤガイ右殻が入っていた陸軍の封筒^{*3}
(左：表面 右：裏面)

スケール ^{*1}: 1 mm ^{*2}: 5 mm ^{*3}: 10mm



32. イタヤガイ 左殻 (B.N.723)



33. カガミガイ (合貝) (B.N.723)



34. アサリ左殻 (B.N.723)



35. オキアサリ左殻 (B.N.723)



36. ハマグリ右殻 (B.N.723)



38. オキシジミ右殻 (B.N.723)



37. チョウセンハマグリ右殻 (B.N.723)



39. シオフキ (合貝) (B.N.723)



40. マテガイ右殻 (B.N.723)



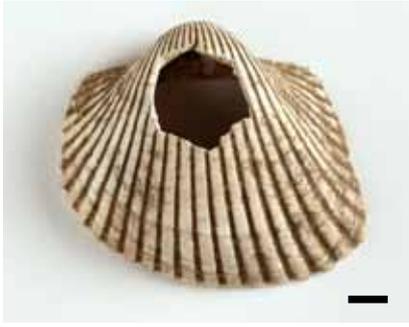
41. オオトリガイ左殻 (B.N.723)

スケール : 10mm

写真4 潮待貝塚出土動物遺存体：二枚貝綱（2）



42. クマサルボウ左殻 (B.N.723)



43. サルボウ左殻 (B.N.723)



44. サルボウ右殻 (B.N.724)



45. フネガイ科左殻 (B.N.538)



46. サルボウ左殻 (B.N.511)



47. サルボウ右殻 (B.N.724)



48. サトウガイ右殻 (B.N.723)



49. ベンケイガイ左殻 (B.N.723)



50. ベンケイガイ左殻 (B.N.724)



51. ベンケイガイ右殻 (B.N.511)



52. ベンケイガイ左殻 (B.N.788)



53. ベンケイガイ左殻 (B.N.723)



54. ハマグリ右殻 (B.N.723)

スケール : 10mm

写真5 潮待貝塚出土動物遺存体：貝製品関連資料



55. 烏ニ類 棘片 *2
(B.N.737)



56. カニ類 鉗脚指節 *2
(B.N.014)



57. カニ類 (ガザミ類?)
鉗脚指節 *2 (B.N.014)



58. モクズガニ
鉗脚指節 *2 (B.N.737)



59. ネコザメ 歯冠 *2
(B.N.534)



60. サメ類 椎骨 *2 (B.N.552)



61. カタクチイワシ 腹椎 *1
(B.N.511)



63. クロダイ属 第二
臀鰭棘 *2 (B.N.737)



62. ボラ科 右主鰓蓋骨 *2 (B.N.534)



64. クロダイ 左前上顎骨 *2 (B.N.443)



65. マダイ 上後頭骨 *2 (B.N.357)



66. マダイ 左主上顎骨 *2 (B.N.534)



67. マダイ 左前上顎骨 *2 (B.N.737)



68. ベラ科? 尾椎 *1 (B.N.428)



69. フグ科 左前上顎骨 *2 (B.N.191)



70. フグ科 部位名称不明 *1
(B.N.737)

スケール *1: 1mm *2: 5mm

写真6 潮待貝塚出土動物遺存体：貝類以外（1）



71. 種不明魚類
第一椎骨^{*2} (B.N.534)



72. 両生綱? 左歯骨^{*1}
(B.N.428)



73. カエル類 右腸骨^{*2}
(B.N.737)



74. イシガメ属 腹甲骨板片^{*2}
(B.N.246)



75. タヌキ 右下顎骨^{*2} (B.N.534)



76. イヌ 第一頸椎^{*2} (B.N.534)



78. イエネコ 右下顎骨^{*2} (B.N.738)



79. イノシシ 底蝶形骨^{*3}
(B.N.738)



80. イノシシ
左下顎犬歯^{*2} (B.N.534)



81. イノシシ 胸椎^{*3} (B.N.738)



77. テン 左大腿骨^{*2}
(B.N.534)



82. イノシシ 左肩甲骨^{*3}
(B.N.738)



83. イノシシ 右尺骨^{*3}
(B.N.534.)



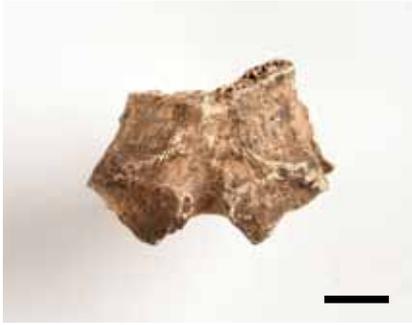
84. イノシシ 右寛骨^{*3}
(B.N.738)



85. イノシシ 左脛骨^{*3}
(B.N.552)

スケール *1: 1mm *2: 5mm *3: 10mm

写真7 潮待貝塚出土動物遺存体：貝類以外（2）



86. ニホンジカ 底蝶形骨 *²(B.N.738)



87. ニホンジカ 右下顎骨 *²(B.N.789)



88. ニホンジカ 左中心第4足根骨 *²
(B.N.534)



89. ニホンジカ 右踵骨 *² (B.N.534)



90. ウシ 右下顎骨 *² (B.N.789)



91. ウシ 尾椎 *² (B.N.738)



92. 鯨骨製品 *¹ (B.N.247)



93. 鹿角製品 *¹ (B.N.738)



94. 鹿角製品 *¹ (B.N.738)



95. 骨製品 (ニホンジカ中手骨/中足骨製) *¹ (B.N.738)



96. 骨角製品 *¹ (B.N.737)

スケール *¹: 5mm *²: 10mm

写真8 潮待貝塚出土動物遺存体：貝類以外（3）、加工痕のある骨角

研 究 紀 要 第 24 号

発 行 日 2020年3月31日

編集発行 下関市立考古博物館

〒751-0866

山口県下関市大字綾羅木字岡 454

T E L 083-254-3061

F A X 083-254-3062

